

東アジアの古代象嵌銘文大刀

西 山 要 一

1 はじめに

日本の古墳から発見される大刀には、刀身や柄頭・鐔・鞘口・鞘尻などの刀装具に文様を象嵌した象嵌文様大刀がある。その数は全国で約300例、北は山形県・宮城県から西は熊本県・宮崎県に及ぶ。また、刀身に文字を象嵌した象嵌銘文大刀は古墳出土品のほか伝世された大刀や文献に記された大刀、そして、古代・中世のものをもあわせると15例を数える。

中でも最も古い象嵌大刀は、奈良県天理市所在の東大寺山古墳から出土した漢中平紀年大刀である。全長110センチメートルの鉄製大刀の棟に24文字の金象嵌の銘が記され、冒頭の「中平□年五月丙午」の紀年から、中国・漢代の中平年間、西暦184～189年に造られ、我が国にもたらされておよそ150年間伝世したのち東大寺山古墳に死者とともに埋納されたものであろう。

また、伝世された象嵌銘文大刀としては、朝鮮半島の三国時代・百濟からもたらされた奈良県天理市の石上神社の七支刀がある。全長86センチメートル、両側に3本ずつ枝のある剣身の表裏に61文字の金象嵌の銘が記され、冒頭の「泰和四年五月十六日丙午正陽」の紀年や「百濟王」の記載から、西暦369年に製作され、日本書記の記載によると372年に我が国にもたらされたことがわかり、およそ1700年もの間、石上神社に伝世されてきた。

日本で造られた最も古い象嵌銘文大刀は千葉県市原市・稲荷台1号墳の王賜銘鉄剣で、推定12文字の銀象嵌銘に年紀は記されていないものの5世紀半ばの大刀と推測されている。つづいて埼玉県行田市・稲荷山古墳発見の全長73.5センチメートルの辛亥銘鉄剣には表裏に115文字の金象嵌銘文が記され、冒頭の「辛亥年」は西暦471年にあたる。象嵌銘文大刀は極めて少ないものの6世紀以降も出土品、伝世品、文献記載の大刀等が見られる。

日本の象嵌銘文大刀は、古墳時代にあっては大和政権の一翼を担う豪族の古墳、地方豪族の古墳、要衝管理などの特殊な職掌にあった人物の古墳から発見されたり、その後は永く神社や朝廷に伝わったり、古文獻に記録されるなど、政治・社会・思想などを考える上で注目すべき極めて特異な存在である。

本稿の目的は日本の象嵌銘文大刀の性格を明らかにすることにあるが、その始源である中国と韓国の象嵌銘文大刀もあわせ、銘文内容・象嵌線の組成成分・象嵌技法などの視点から

検討を加えるものである。

2 日本・韓国・中国の象嵌大刀の研究

日本の象嵌銘文大刀の研究は明治時代に遡る。石上神社宮司の菅政友氏等による七支刀の銘文解読⁽¹⁾、1899年の若林勝邦氏⁽²⁾や1911年の古谷清氏⁽³⁾による熊本県・江田船山古墳出土の銀象嵌大刀の銘文解読などに始まり、以後、両銘文大刀の研究は多くの研究者によって行われ、銘文大刀が日本の古代を考える上で極めて重要な資料であることが指摘されている。

最近では、1978年の埼玉県・稲荷山古墳発見の辛亥銘鉄剣⁽⁴⁾、1983年の島根県・岡田山1号墳発見の額田部臣銘大刀⁽⁵⁾、同年の兵庫県・箕谷2号墳発見の戊辰銘鉄刀⁽⁶⁾、1987年の千葉県・稲荷台1号墳発見の王賜銘鉄剣⁽⁷⁾等の発見が相次ぎ、象嵌銘文大刀にも内容・時代・発見古墳が実にバラエティーに富むことが判り、銘文内容のみならず象嵌技法の研究もあわせ行われ研究の黄金時代を迎えた感がある。

象嵌文様大刀の研究は1940年に神林淳雄氏⁽⁸⁾により始められ、1980年前後の相次ぐ象嵌銘文大刀の発見に触発されて飛躍的に進展した。1981年の橋本博文氏の研究は、亀甲繫鳳凰文象嵌大刀を編年しその製作には百済系渡来工人が関与するとし⁽⁹⁾、1986年にはさらに深めた研究を発表している^(10・11)。町田章氏の1984年の研究は、日本の象嵌の始源を中国・戦国時代に求め、日本の5世紀～6世紀前半の象嵌は百済・伽耶系の渡来工人によって製作されたものとした⁽¹²⁾。

筆者は1985～86年に、125遺跡159例の象嵌大刀を集成し、5世紀代、6世紀前半代、6世紀後半～7世紀初めの3つの画期を設定し、その分布が畿内を中心にして次第に全国に拡大することから、象嵌大刀の存在は国家形成にむかう古墳時代の政治的・社会的状況を色濃く反映していることを述べた^(13・14)。

また、地域ごとの象嵌大刀の編年や製作技法の解明を試みた研究は、1985年の横田義章氏の九州地方の象嵌大刀⁽¹⁵⁾、瀧瀬芳之氏・野中仁氏の埼玉県の象嵌大刀⁽¹⁶⁾、鈴木敏則氏の静岡県の象嵌大刀⁽¹⁷⁾、松田隆嗣氏・今津節生氏の福島県の象嵌大刀⁽¹⁸⁾等がある。

一方、象嵌技法や組成成分分析の研究では、樋口清治氏・青木繁夫氏の中国・漢代の金銀象嵌鉄鏡の保存処理と材質・技法を探る先駆的研究がある⁽¹⁹⁾。その後、金工技術の立場からの田中勇氏・中野政樹氏と、保存科学研究の立場からの馬淵久夫氏・沢田正昭氏と筆者らの辛亥銘鉄剣の保存処理に伴う調査・研究⁽⁴⁾によって、古墳時代象嵌の材質・技法等を明らかにすることができた。さらに、筆者による20数例の象嵌のX線写真撮影や成分分析等による技術の解明⁽²⁰⁾、肥塚隆保氏等の調査⁽²¹⁾によって銅象嵌の存在も明らかにされた。1996年筆者は、象嵌銘文大刀および象嵌大刀について、象嵌の組成成分、技法、銘文内容などの多角的視点から研究を加え、象嵌銘文大刀および象嵌大刀の性格について論じた^(22・23)。

韓国では、1978年に慶尚北道高靈郡池山洞32号古墳出土の環頭大刀に唐草文の銀象嵌文様のあることがX線透過写真撮影により判明したのをきっかけに、1982年の全羅北道南原月山里M1-A号石室の金銀象嵌亀甲繫象嵌大刀、1984年の慶尚南道昌寧市・昌寧校洞11号古墳出土大刀の象嵌銘文の発見などの象嵌大刀研究の成果が相次いだ。1989年に李午熹氏は、1例の象嵌銘文大刀と9例の象嵌文様大刀及び3例の象嵌胡籙金具を集成して主として象嵌技法について研究し⁽²⁴⁾、その後の慶尚南道陝川玉田古墳群等の象嵌資料の増加に伴って1998年には2例の象嵌銘文大刀、15例の象嵌文様大刀、4例の金具等を集成し、象嵌線の成分分析と象嵌技法の研究を更に進めて三国時代の象嵌大刀の性格や技法の研究を格段に発展させた^(25・26)。

中国における象嵌銘文大刀の研究は個々の発見に際する報告にとどまっている。1973年、史樹青氏は中国の象嵌の歴史を概観し、越王勾踐の銅劍について触れている⁽²⁷⁾。1974年、劉心健・陳自経の両氏は山東省蒼山県卞莊出土の東漢永初紀年鉄刀の銘文について日本の東大寺山古墳発見の中平紀年大刀との類似を指摘している⁽²⁸⁾。1979年に王愷氏は江蘇省徐州市駝竜山出土の東漢建初二年五十涑鋼劍の銘文を検討し、その製作地を四川省西都蜀郡の官営工房であることを指摘している⁽²⁹⁾。1998年潮見浩氏は四川省西都市天廻山3号崖墓出土の金錯書刀の銘文について、劉志遠氏の報告⁽³⁰⁾では未判読となっている文字を特定して銘文内容全体にわたって検討を加えている⁽³¹⁾。中国では象嵌銘文大刀の象嵌技法や象嵌線の分析研究は行われていない。

3 日本・韓国・中国の象嵌銘文大刀

日本には15例、韓国には2例、中国には4例の象嵌銘文大刀がある。墳墓から発見されたもの、伝世するものなど様々であるが、ここでは銘文大刀の銘文内容を中心に概観する。

(1) 日本の象嵌銘文大刀(表1・図1～3)

日本では、古墳発見の象嵌銘文大刀のほかに、社寺や旧家に伝世する大刀、文献資料に記されている大刀など15例が知られている。それらは、日本で造られた大刀、中国で造られた大刀、朝鮮半島で造られた大刀と様々である。年代順に象嵌銘文大刀を概観する。

① 漢中平紀年大刀

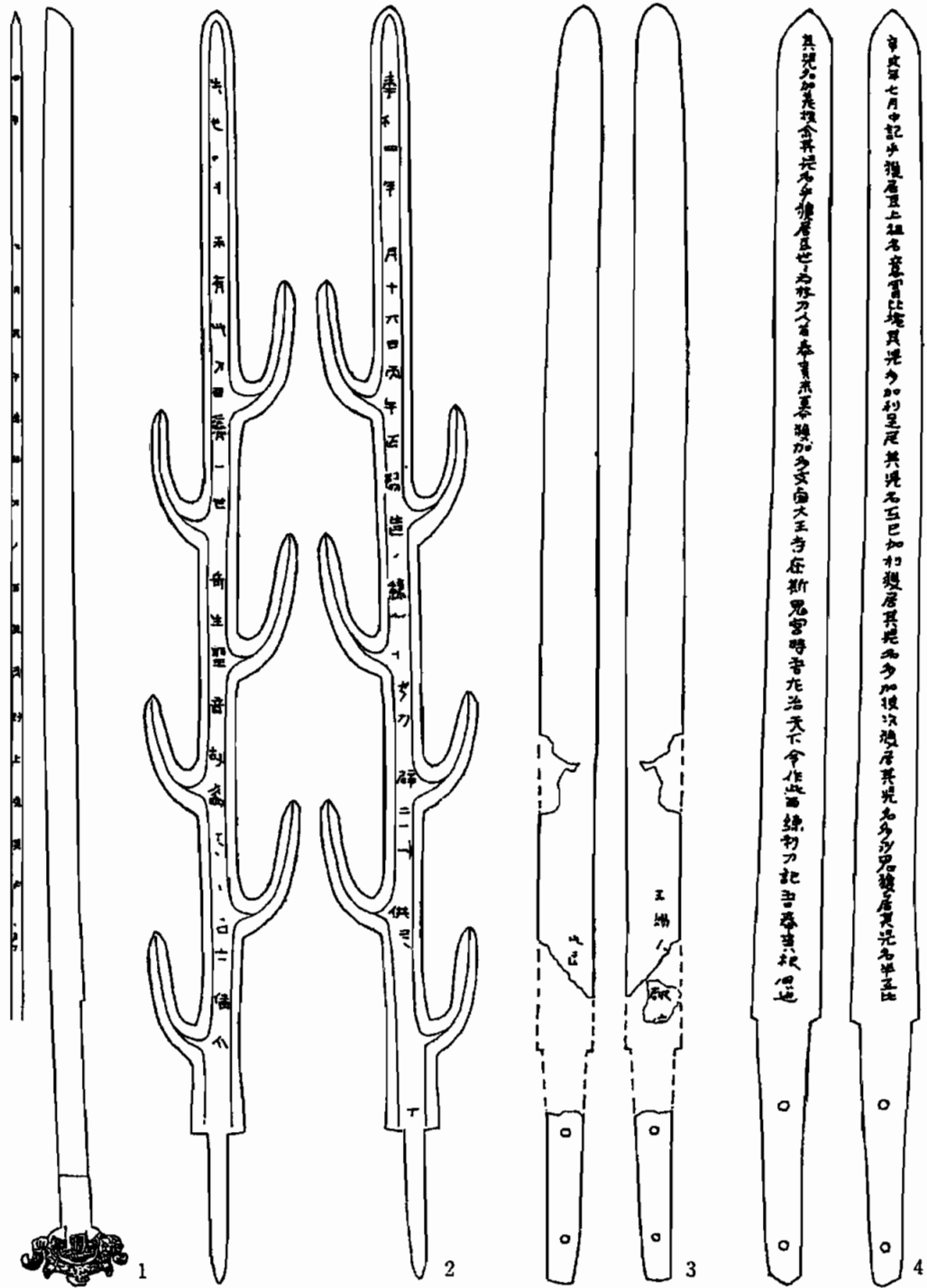
奈良県天理市に所在する全長140メートルの前方後円墳である東大寺山古墳から発見された。鉄製の漢中平紀年大刀は全長110センチメートルを計り、内部に家形を飾る銅製環頭を装着する鉄刀である。銘文は、刀の棟に切っ先より関に向かって

中平□年五月丙午造作支刀百練清剛上應星宿下辟不祥

表1 日本の象嵌銘文大刀

名 称	発 見 地	刀 剣・銘 文	製 作 地・年 代
1 漢中平紀年大刀 <small>かんちゅうへいきねんたいち</small>	奈良県天理市 東大寺山古墳 前方後円墳 140 m	全長 110 cm 刀棟・金象嵌 24 字	中国・後漢 中平年間 (184~189 年)
2 七支刀 <small>ひちしとう</small>	奈良県天理市 石上神社 伝 世	全長 84 cm 剣両面・金象嵌 61 字	韓国・百濟 泰和 4 年 (369 年)
3 『塵袋』護身剣 <small>ちりぶくろ ごしんけん</small>	『塵袋』記載	? 刀 棟・? 46 字	韓国・百濟 3~5 世紀
4 王賜銘鉄剣 <small>おうしめいてっけん</small>	千葉県市原市 稲荷台 1 号墳 円墳・径 18 m	復原長 73 cm 剣両面・銀象嵌 12 字	日本 5 世紀
5 辛亥銘鉄剣 <small>しんがいてっけん</small>	埼玉県行田市 稲荷山古墳 前方後円墳 119 m	全長 73.5 cm 剣両面・金象嵌 115 字	日本 辛亥年 (471 年)
6 銀象嵌大刀 <small>ぎんぞうがんだち</small>	熊本県菊水町 江田船山古墳 前方後円墳 62m	残存長 90.5 cm 刀棟・銀象嵌 74 字	日本 5 世紀
7 額田部臣銘大刀 <small>ぬかたべのおみめいたち</small>	島根県松江市 岡田山 1 号墳 前方後方墳 24m	残存長 60 cm 刀佩表・銀象嵌 残 18 字	日本 6 世紀
8 戊辰銘鉄刀 <small>ぼしんめいてっとう</small>	兵庫県八鹿町 箕谷 2 号墳 円墳・径 16m	残存長 68 cm 刀佩裏・銅象嵌 6 字	日本 戊辰年 (608 年)
9 金錯銘直刀 <small>あんなくめいちよくとう</small>	群馬県下の古墳	全長 77.5 cm 刀佩表・金象嵌 4 字	日本 7 世紀
10 丙子椒林剣 <small>へいししやうりんけん</small>	大阪府大阪市 四天王寺 伝 世	残存長 65.8 cm 刀佩裏・金象嵌 4 字	? 7~8 世紀
11 三寅剣 <small>さんいんけん</small>	長野県小海町 個人蔵 伝 世	残存長 34.5 cm 刀棟佩表裏・金銀象嵌 9 字(梵字含)	中国? 7~8 世紀
12 坂上田村麿將軍剣 <small>さかのうえたむらまろしょうぐんけん</small>	『昭訓門院御産愚記』 記載	? 剣両面・金象嵌 23 字	日本 9 世紀
13 相應和尚剣 <small>そうおうわじょうけん</small>	『明匠略伝』 記載	? 剣・金象嵌 不動明王真言	巴子国(ペルシャ)? 中国? 9 世紀
14 流麿寺鉄剣 <small>ながれはいじてっけん</small>	福島県棚倉町 流麿寺跡 堂跡	残存長 43.4 cm 剣両面・銀象嵌 梵字 8 字	日本 9~11 世紀
15 襦祭剣 <small>ぶさいのつもぎ</small>	山形県米沢市 上杉神社 伝 世	全長 50.3 cm 剣両面・金象嵌 梵字 108 字	日本 14~16 世紀

図1 日本の象嵌銘文大刀(1)



1 漢中平紀年大刀 2 七支刀 3 王錫銘鉄劍 4 辛亥銘鉄劍

図2 日本の象嵌銘文大刀(2)

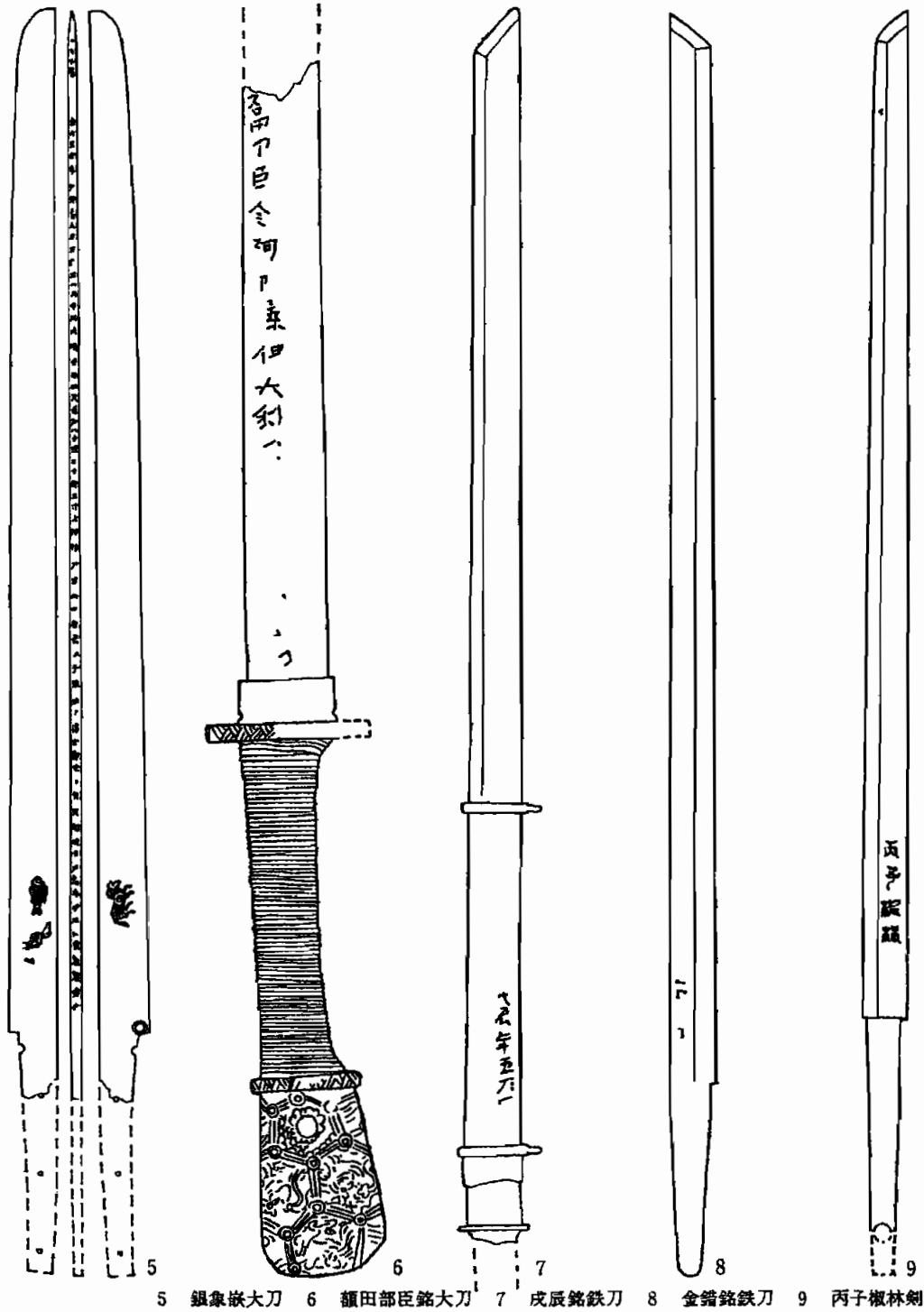
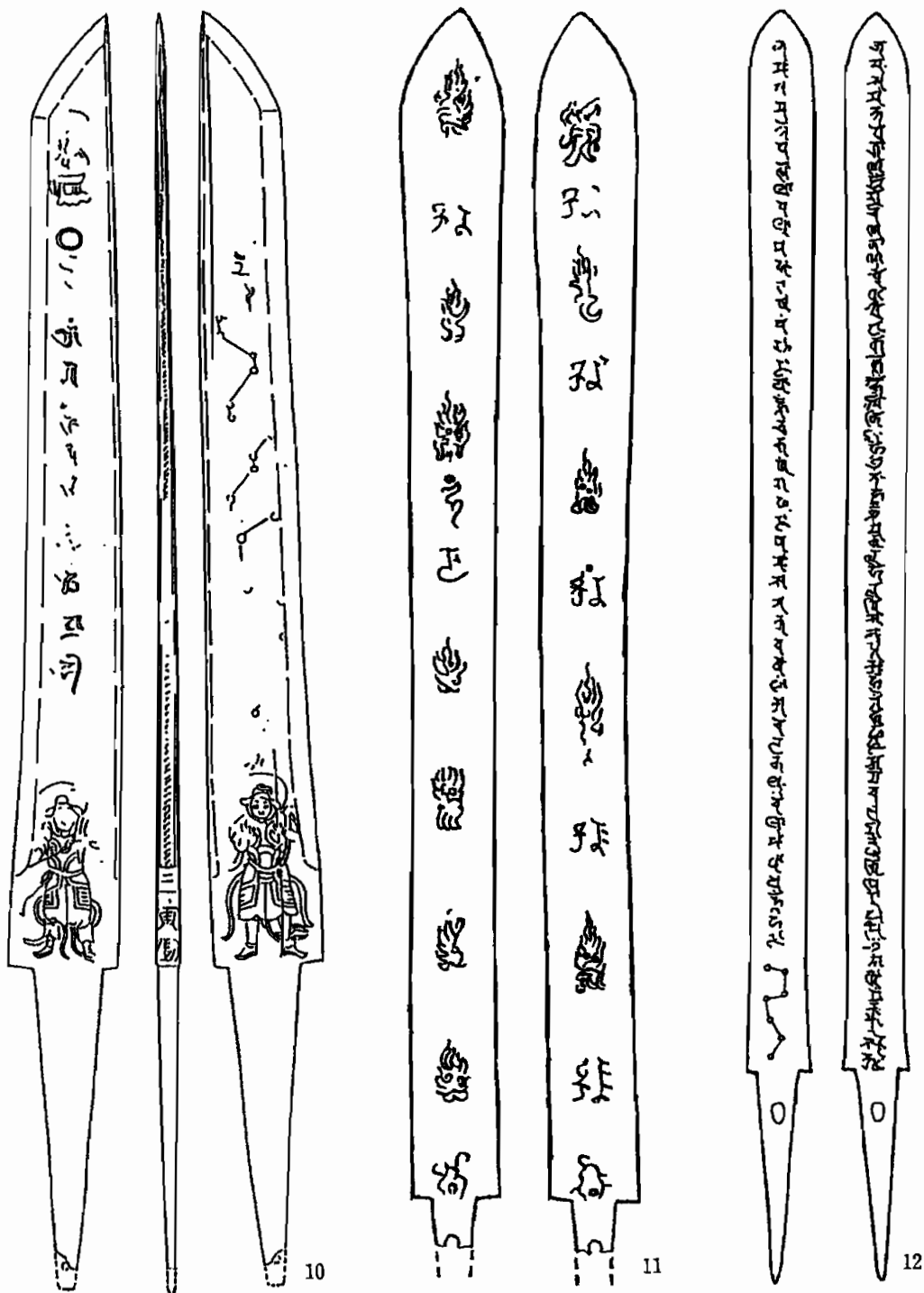


図3 日本の象嵌銘文大刀



10 三 寅 劍 11 流 麿 寺 鉄 劍 12 禰 祭 劍

の隸書体で24字が金象嵌されている。中国・後漢の中平年間（西暦184～189年）の五月丙午の吉日に、鋼を良く鍛え刀を造った。天空の星座の良き巡りと同じに良き日々を恙なく過ごせるよう、また、不幸を避けることができるよう願うと、記している。中国・山東省臨沂地区蒼山県卞荘で発見された東漢永初紀年鉄刀と刀の形や銘文内容が酷似している。護身と辟邪の願いを込めた象嵌銘文大刀である。

② 七支刀

奈良県天理市の石上神社に伝世する七支刀は、全長84センチメートル、両刃の剣の左右交互に各3本ずつの枝をもつ特異な形の鉄剣である。剣の両面にわたって

泰和四年五月十六日丙午正陽造百練□七支刀世辟百兵宜供侯王□□□□作

先世以来未有此刀百濟王世子奇生聖音故為倭王旨造伝示后世

の計61文字が隸書体で金象嵌されている。泰和四年（西暦369）五月十六日丙午正陽の吉日に、（鋼）を鍛えて七支刀を造る。多くの敵・邪気を避け、宜しく王にお願いする。この刀は□□□□（工人名か）が造った。先世以来いまだこの刀有らず、百濟王の子奇生聖音が倭王の為に造った旨を後世に伝え示す、との意味である。

『日本書紀』神功皇后摂政五二年（372）の条に

・・・・五二年秋九月丁卯朔丙子、久氐等從千熊長彦詣之。則獻七支刀一口・七子鑑一面、及種々重寶・・・・

と記述されている七支刀に該当し、遺品と記録が一致する稀有な例として注目される。⁽³³⁾

金象嵌線の剥落している文字があるものの、象嵌の整彫りが鮮明に残り、糸象嵌技法によるものであることが判明する。奈良国立文化財研究所の象嵌線のX線分析によると、金の純度は79%である（金以外の含有成分は未公表である）。

③ 『塵袋』護身劍

鎌倉時代の百科事典『塵袋』⁽³⁴⁾に、朝廷に伝世する刀、大刀契について次の記述がある。

・・・・大刀ノ中ニ靈劍ニアリ、百濟国ヨリタテマツル所ナリ。一ヲハ三公戰闘ノ劍ト名ク又將軍ノ劍トモ破敵ノ劍トモ云フ。護身ノ劍ハ疾病邪氣ヲノゾク。劍ノ左ニハ日形南斗ノ六星朱雀ノ形青龍ノ形ヲ図ス、右ニハ月形北斗七星玄武形白虎ノ形ヲ図ス。破敵ノ劍ニハ左ニハ三皇五帝ノ形南斗ノ六星青龍ノ形西王母カ兵刃符ヲ図ス、右ニハ北極ノ五星北斗七星白虎ノ形老子破敵ノ符ヲ図ス。又護身ノ劍ノ銘アリ、カノ銘ニ云ク

歳在庚申正月百濟所造三七練刀南斗北斗左青龍右白虎前朱雀後玄武避深不祥百福会就
年齢延長万歳無極

・・・・堀川院ノ御宇寛治八年十月廿四日ノ焼亡ノトキ靈劍ヤケ損シ又西王母カ兵刃符ワツカニノコレリ・・・・

朝廷には百濟よりもたらされた破敵劍（三公戰闘劍、將軍劍ともいう）と護身劍の2劍が

伝えられていて、それぞれには符が書かれている。護身劔には、日形・南斗ノ六星・朱雀形・青龍形・月形・北斗七星・玄武形・白虎形を描き、さらに、庚申年正月に百済が良く鍛えて造った。南斗六星と北斗七星の佐けを得、東を青龍、西を白虎、南を朱雀、北を玄武に護られて、不祥を避けて多くの福寿を就し、齡を永らえめでたきこと極まりなしとの銘があり、辟邪・招福の願いが込められたまさしく護身劔の名のとりの護身の劔である。

銘文の書式形態や類似例との比較、百済で製作され日本に齎らされたことなどの記載内容も正しいものと評価されている⁽³⁵⁾。そして、劔は焼損したものの文字や符が僅かに残っているとのことから、これらは象嵌の銘文と符であったことが判る。この劔は現存しないが、百済よりもたらされたこと、破敵劔と一対であること、鎌倉時代まで伝世されていたこと等、象嵌銘文大刀の性格を考える上で極めて貴重な文献記録である。

④ 王賜銘鉄劔

千葉県市原市にある直径18メートルの円墳、稲荷台1号墳より発見された鉄劔である。関の付近を欠失するが、全長約73センチメートルと推定されている。劔表の関に近いところ、鎬より右に偏して

王賜□□敬安

の4字、劔裏の鎬の右よりに偏して

此廷□□□□

の2字の計6字が読み取れるが、文字間隔や銘文内容から表裏ともに6字ずつ計12字が記されていたものと推測されている。王が□□（人名か）に賜う。敬んで安寧を願う。此の劔は□□□□（良く鍛えたの語か、作者名か）と読まれ、吉祥を願ったものである。

発表されているX線写真から、糸象嵌の技法であることが判る。象嵌線の組成分析結果は未発表であるが銀象嵌であろう⁽⁷⁾。

⑤ 辛亥銘鉄劔

埼玉県行田市に所在する埼玉古墳群の一つ、全長119メートルの前方後円墳である稲荷山古墳から発見された。稲荷山古墳は古代武蔵国にあたる地域の首長の墳墓と推定されている。

辛亥銘鉄劔は全長73.5センチメートルを計り、劔の鎬に沿って切っ先より表に57字、裏に58字の合計115文字の銘文が金象嵌されている。

辛亥年七月申中記乎獲居臣上祖名意富比埜其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比

其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

辛亥年（西暦471年）に記す。乎獲居臣は意富比埜を先祖とし、多加利足尼、弓已加利獲居、多加披次獲居、多沙鬼獲居、半弓比、加差披余、乎獲居臣と八代の家系を重ねてきた。

代々、大王の杖刀人（武官）の首として仕えて今にいたる。獲加多支鹵大王（雄略天皇）が斯鬼宮に居られた時、私（乎獲居臣）はその治世を左けた。よく鍛えた鋭い刀を造らせて、私が大王に仕えた由来をここに記す、との銘文内容である。護身や破敵などの語はなく、武蔵の国を支配する乎獲居臣が四道將軍である意富比埜（大彦）を祖先とする由緒ある家系に連なり、大王を佐ける重要な役割を担ったことを強調する内容である。

辛亥銘鉄劍銘文は、科学的保存処理の途上に発見され、様々な科学的分析が行われた。劍表面に残る鞘材と柄木材は、電子顕微鏡による樹種同定の結果ヒノキ科の木材であること、鉄劍鏃のX線分析の結果は、鉄劍の素材は中国揚子江流域の含銅磁鉄鏃を沙鋼法により精錬されたものと推測されること、象嵌金線の蛍光X線分析および中性子放射化分析の結果は金73%・銀27%の金銀合金を示し、金色の輝きを保ちつつ象嵌の作業性に適した硬さをたもつ合理的な合金比率であることなどを明らかにした。また、X線写真像の検討や象嵌線の顕微鏡調査によって、鉄劍表裏の鏃に沿って墨で銘文を書き、鑿で文字を刻み、金線を槌と鑿で打ち込み、表面をやすり仕上げする古代の糸象嵌技法が初めて克明に復原された。⁽⁴⁾

⑥ 銀象嵌大刀

熊本県菊水町に所在する全長47メートルの前方後円墳である江田船山古墳は、古墳の規模や構造、金銅製冠帽や飾履など豊富な出土品から、後の肥後国にあたる地域の首長の墳墓と推測されている。銀象嵌大刀は茎の約三分の二を欠くが、残存の長さ90.5センチメートルを計る。この刀の棟の切っ先より関にむかって

治天下獲加多支鹵大王世奉事典曹人名无利弓八月中用大鑄釜并四尺廷刀八十練六十摺三寸上好□刀服此刀者長寿子孫注々得恩也不失其所統作刀者名伊太加書者張安也

の74字の銀象嵌の銘文が記されている。獲加多支鹵大王の治世の時、仕え奉る典曹人（文官）の名は無利弓という。八月に大釜を用いてよく鍛えた見事な四尺の刀を造った。この刀を佩する者は長寿にして子孫は広く恩を得、支配の力を失うことはない。刀を作る者の名は伊太加、銘文を書きし者は張安である。

紀年は記されていないが、辛亥銘鉄劍と同じ獲加多支鹵大王の名が見られることから5世紀後半のものとみられる。辛亥銘鉄劍の杖刀人（武官）・乎獲居臣に対して銀象嵌大刀の典曹人（文官）・无利弓の対比は古墳に葬られた人物を語っていて興味深い。銀象嵌大刀には佩表の関近くに馬と花形が、佩裏の関近くに魚と鳥が銀象嵌されている。この鉄刀は大正時代に文字の表出作業が砥石やすりを使って幾度かなされたようで、その際、やや研ぎ過ぎたためか文字線画が三角形の列点状になっている部分が見られ、ここより糸象嵌の技法であることが判る。また、東京国立文化財研究所によるエミシオグラフィー撮影によって、不明であった文字が確認された。⁽³⁶⁾

⑦ 額田部臣銘大刀

島根県松江市に所在する全長24メートルの前方後方墳、岡田山1号墳は古代出雲国意宇郡の豪族の墳墓と思われる。

額田部臣銘大刀は刀身の半ばを欠き、残存する長さ60センチメートルの円頭の大刀である。銘文は大刀佩表に

□□額田部臣令阿□素得大利刀□□□□□□

の推定18文字以上を銀象嵌する。・・・額田部臣が阿□素をして大利刀を得・・・と記している。いまは失われた刀身の上半部には年紀や由来が記され、大利刀の下には吉祥句が記されていたのであろうか。

額田部臣銘大刀の銘文もまた保存処理中に発見され、様々な科学的分析が行われた。X線分析によって象嵌線はほぼ純度100パーセントの銀であること、X線写真によって鑿の運びや象嵌溝の形態が観察され、本大刀も糸象嵌技法の典型例であること、この大刀を飾る鉄製円頭柄頭の亀甲繫双鳳文象嵌と鐙を飾る文様象嵌の材質や技法も銘文と同じであること、などが判明した。⁽⁵⁾

⑧ 戊辰銘鉄刀

兵庫県八鹿町に所在する箕谷古墳群のなかでは、やや規模の大きい直径16メートルの円墳である箕谷2号墳は、古墳時代終末期の地方有力者の墳墓である。

戊辰銘鉄刀は茎を欠き、残存する長さは68センチメートルを計る。銘文は大刀の佩裏の関近くに

戊辰年五月中

の6文字が銅象嵌されている。戊辰年（西暦608年）五月の年紀のみが記されている。この刀を造り賜った歳を示すものであろうか。

象嵌線は奈良国立文化財研究所の調査によって、ほぼ純度100パーセントの銅であることが明らかにされた。⁽⁶⁾

⑨ 金錯銘直刀

金錯銘直刀は群馬県下の農家の縁側下にあったといわれる全長77.5センチメートルの鉄刀で出土遺跡は不明である。日本刀の研師が研究のために研いだところ、大刀佩裏の関近くに4文字が金象嵌されているのが発見された。象嵌文字の残存状態が悪くて読み取れず、意味内容は不明である。銅象嵌との説もある。

鉄刀のカマス切っ先の特徴や、前述の戊辰銘鉄刀や後述の丙子椒林剣と同様に銘文文字数が少なくその位置も類似していることから、7世紀の遺品と考えられる。⁽³⁷⁾

⑩ 丙子椒林剣

丙子椒林剣は大阪市の四天王寺に聖徳太子佩用の剣として伝えられてきた。茎先端が僅かに欠失するが、残存する長さは65.8センチメートルを計る。佩裏の関の近くに

丙子椒林

の4字の銘文が金象嵌されている。

この刀は丙子の歳に造られ、その持ち主は椒林である、との意味であろうか。剣はそのカマス切っ先の形制から、飛鳥時代か奈良時代に製作されたものと考えられる。1200年以上の伝世中に幾度となく研磨された結果、刃部はかなりやせ細り、象嵌部分は周囲から浮き上がった状態になっている。象嵌線の一部に赤銅色の銅線らしきものが見られ、象嵌そのものも幾度か修復された可能性⁽³⁸⁾がある。

⑪ 三寅劔

長野県小海町の畠山家に伝世する小刀である。茎の先端を僅かに欠失するが、現存の長さ34.5センチメートルを計る。棟部の下端に

三寅劔

の3字が銀象嵌されている。棟部の切っ先から三寅劔銘までの間には、両側を銀象嵌直線に挟まれた、直線・波状線・逆S字状文が連続して銀象嵌で描かれている。佩表には棟に沿った銀象嵌の直線のほか、3つの象嵌文様が施されている。切っ先の文様は意匠不明である。次に裏返しの上公・三台・北斗七星の星辰が順次並び、関近く⁽³⁹⁾に多聞天像が配置されている。星辰の星々を結ぶ繫線と多聞天像の顔の輪郭・戟・天衣の一部が金象嵌で他は銀象嵌である。佩裏にも棟に沿った銀象嵌の直線のほか、3つの象嵌文字・文様が施されている。切っ先の文様は意匠不明である。梵字銘文は9字からなり、第1字はオン、第2字はバであるほかは研ぎ減りのため判読できない。そして、関近く⁽⁴⁰⁾に持国天像が配されている。持国天像の天衣の一部が金象嵌で他は銀象嵌である。

三寅劔は伝世中の研ぎ減りが著しく文様が不明である反面、本来一本の線であった象嵌線は、研ぎ減りによって小さな三角形の断続線となり、糸象嵌の上面が削除され、象嵌線の底部のみが残されたものであることが判る。X線透過写真およびエミシオグラフィー写真によっても技法が確認された。

三寅劔は寅の歳、寅の月、寅の日に打造したが故に名付けられたが、その造られた時代については様々の意見がある。やや内反りのカマス切っ先であること、三公・三台・北斗七星の描写が正倉院や四天王寺の七星劔と類似すること、梵字が古体であること、多聞天と持国天の像が古様であること等を勘案すると飛鳥時代か奈良時代の作とするのが妥当^(39・40)であろう。三寅劔についての研究は後述する。

⑫ 坂上田村麿將軍劔

『昭訓門院御産愚記』は、昭訓門院の産児の際の守刀として、急遽使用した坂上田村麿將軍劔について次のように記している。

・・・件御劔後日拜見之、頗古物寶物歟、サメツカ、中心無之、銀ノツハ、平鞘、シ

ロカネノセメ・イシツキ、黒地、但所々蒔之歟、胡人狩獵之躰蒔之、或鹿、或寅狩之、胡人騎馬馳或以弓射之、或以鋒突之、其身鯨尾也、有刃、有銘、其詞云、

上上上 不得他家是以爲誓謹思

今一方

坂家寶劍守君是以爲名

劍身ヲ堀天以金入字也

入赤地錦袋如法古物也、其上又被納赤地錦袋云々、然而被獻之時撒上袋被納改白袋也・・

・・・

この記録から坂上田村麿將軍劍には、「上上上 他家はこの刀を得ず。もって誓いを為して謹んで思う。坂家寶劍は天皇を護りしことをもってこの名と爲す」の意味の金象嵌があったことがわかる。⁽⁴¹⁾この劍は、銀の装具をつけ、鞘は胡人の狩獵文を蒔絵で飾る古いものという。東大寺大仏殿の基壇から出土した金銀平脱狩獵文大刀を彷彿とさせる。

⑬ 相應和尚劍

『明匠畧傳』の相應和尚の条には、巴子國劍について次の記載がある。

・・・・・同年。西三條女御有御惱。右大臣請和尚令加持。不幾平復。大臣爾感。奉巴子國劍。刃間以金鏤銘不動明王慈護明。此元者。入唐三品親王有志。自大唐被贈於〔大臣之物也。爲稀有之寶。家爲殊勝之護。而感和尚〕驗德所被奉也。朗善大德與和尚共同行夜出庵。不幾有大叫喚之聲。和尚走出見之。朗善橫出舌辟將死。和尚大驚揮劍加持。經三時許。以蘇生。・・・・・

右大臣藤原良相が女御平復の礼として相應和尚に贈った巴子國劍（ペルシャ型の劍）はもと高丘親王より藤原良相に贈られたもので、健康・安寧を不動明王に願う真言である不動明王慈護明が金象嵌されていた。高丘親王は次代の天皇位を約束されながら、葉子の乱によって皇太子を廃位され、求道者となって渡唐しベトナムからインドをめざす途上消息を絶つ数奇な運命を辿った人物である。不思議な経歴の人のもつ劍は、また、不可思議な靈力をもつ劍となりえたのであろう。

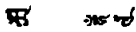
相應和尚劍の記事は貞観3年（861）のこと、劍は現存せず、金象嵌の不動明王慈護明が梵字表現なのか漢字表現なのかも定かではない。時代は異なるものの、後述の梵字による不動明王真言を金象嵌する禰祭劍に類似するものであろう。⁽⁴²⁾

⑭ 流麿寺鉄劍

福島県棚倉町に所在する流麿寺跡から発見された鉄劍は、茎の過半を欠失し、残存の長さ43.4センチメートルを計る。劍の片面には切っ先より、火焰文と梵字が交互に記されている。梵字は次の5字である。

𑖀 𑖁 𑖂 𑖃 𑖄

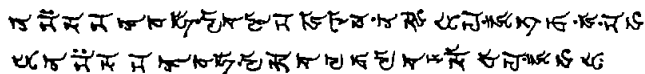
他面には切っ先より、火焰文と梵字が不規則に記され梵字は次の3字である。



両面合わせて梵字8字と火焰文14が銀で象嵌されていることがX線透過撮影によって明らかにされた。今後行われる予定の保存処理や科学分析による新しい事実の発見が期待される。なお、流麿寺跡は平安時代の遺跡で、鉄剣の発見された遺構は堂跡と推定⁽⁴³⁾されている。

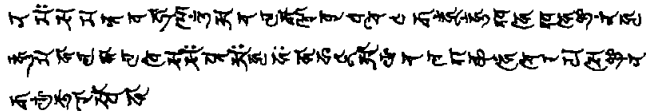
⑮ 禰祭劍

山形県米沢市に所在する上杉神社は上杉謙信を祀る。ここに、謙信が戦場において常に携行したといわれる禰祭劍が伝えられている。全長50.3センチメートルを計る鉄剣でその表には、



の梵字25字よりなる不動慈救呪と、梵字21字よりなる無動金剛能成就一切事業杵印明第三が金象嵌され、その下端の関に接して金の星と銀の繫線よりなる北斗七星が象嵌されている。

裏には



の梵字63字よりなる無動金剛劍印明が金象嵌されている。

表裏の梵字真言は、諸魔・障難・災厄を降伏して魔障を無くし、住所・結界を守護し、人々に安寧をもたらすことを願ったものである。本来、禰祭劍の意味するところは、国家・人民を護り、干戈の難を救う神として武家で信仰されていた摩利支天の修行に使うものであるから、本劍はこれとは性格を異し、「不動明王真言劍」とでも称されるべきもので何時のころかに混同してしまったものであろうか。梵字不動明王真言の表現や劍の形制から室町時代の作と見られる。

本劍もまた、伝世の間に幾度か研磨されたと見られる研ぎ減りがあり、梵字・北斗七星の所々に楔形の連続部分が見られ、他の象嵌大刀と同様に糸象嵌技法による象嵌であることが判る⁽⁴⁴⁾。

(2) 韓国の象嵌銘文大刀 (表2・図4)

韓国の象嵌銘文大刀は慶尚南道発見の2例が知られているが、両例ともに日本の植民地支配の時代に発掘された大刀で、出土状態等の詳細は不明である。象嵌銘文の存在は最近のX線透過写真の撮影によって知られた。その他、韓国では前述の百済で造られ日本にもたらされた七支刀と『塵袋』護身劍も含めると4例となる。また、16世紀以降の三寅劍・四寅劍については後述する。

表2 韓国・三国時代の象嵌銘文大刀

名 称	発 見 地	刀 剣・銘 文	製 作 地・年 代
16 有銘環頭大刀 <small>やうめいかんとうのたち</small>	朝鮮半島 (伝昌寧出土)	残存長 27.5 cm 刀棟・銀象嵌 残 16 字	朝鮮半島 5 世紀末～6 世紀初
17 有銘円頭大刀 <small>やうめいえんとうのたち</small>	韓国慶尚南道 昌寧校洞11号墳	全長 74.0 cm 刀棟・金象嵌 9 字	韓国 5 世紀末～6 世紀初

⑯ 有銘環頭大刀

東京国立博物館保管の朝鮮半島出土（伝韓国昌寧出土）の本大刀は、鉄芯銀張の単龍環頭大刀の形式で、1989年にX線透過写真撮影を行い象嵌銘文の存在が確認された。

刀身の半ばを失い、残存する長さは27.5センチメートルを計る。保存処理と象嵌表出の結果、判明した銘文は刀身の棟に切っ先方向より

□□不畏也□令此刀主富貴高遷財物多也

の16字が残存していた。・・・畏れず也。□はこの刀の持ち主をして富貴にして高く遷り、財物多く令むるなり、との意味が読み取れる招福を願う刀である。刀身上半部には、年紀や製作の由来についての語句が想定され、刀の形式から5世紀末の製作と考えられている。象嵌線の成分分析結果は、ほぼ100%の高純度の銀を使っていることを示している⁽¹⁶⁾。

⑰ 有銘円頭大刀

慶尚南道・昌寧校洞11号墳より1919年に発掘された本大刀は、長く東京国立博物館に保管されていたが、日韓条約締結後に韓国に返還され、1984年にX線透過写真撮影によって銘文の存在が確認された。

本大刀は全長80.5センチメートルを計る、銀装円頭の大刀である。銘文は棟下部に切っ先方向より

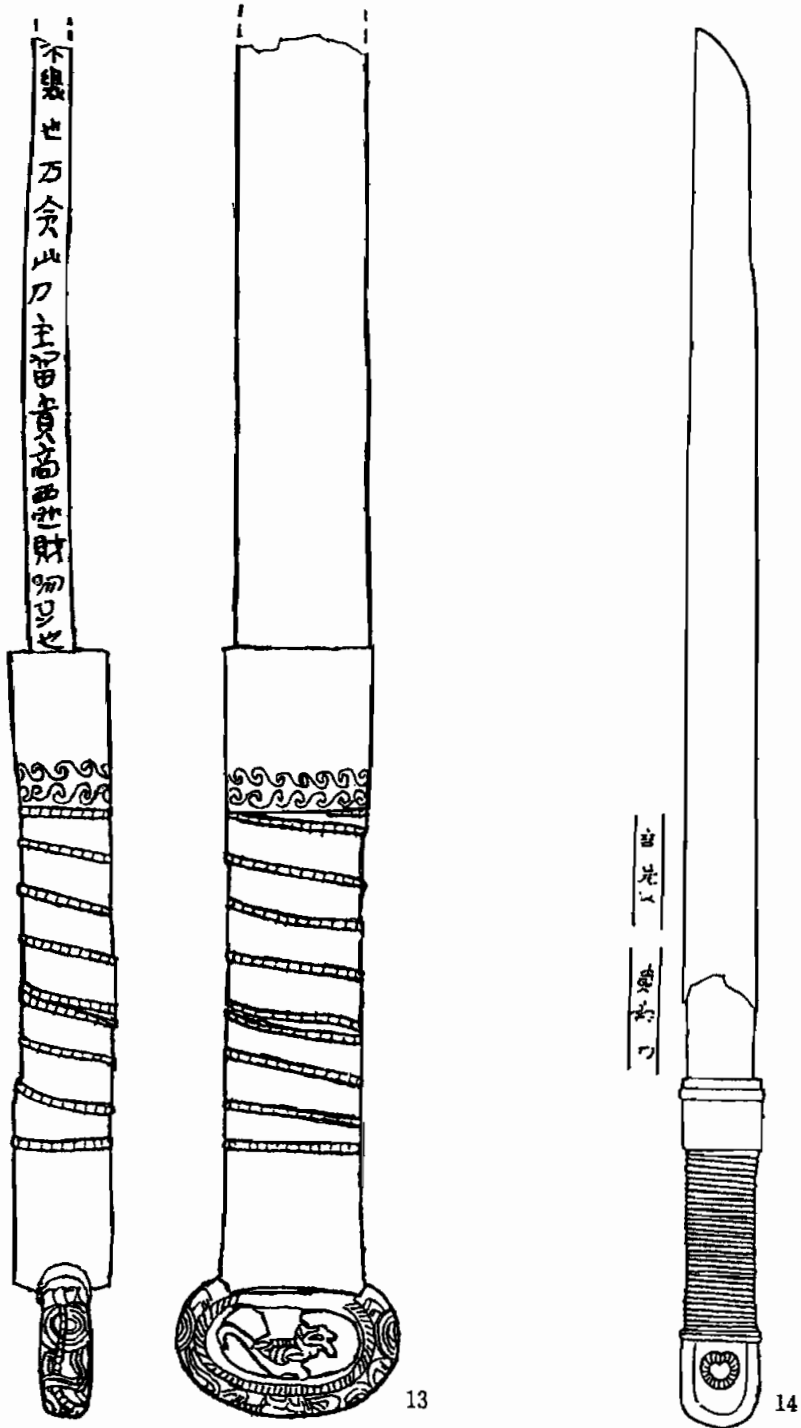
□□上部先人□貴□刀

の8字以上が象嵌されていたものと推測できる。残存する文字が少なく意味を読み取るのは難しいが、富貴を願う吉祥の記された刀であろう。5世紀末～6世紀初頭の製作と思われる。文字は金象嵌と見られるが科学分析はなされていない⁽⁴⁶⁾。

(3) 中国の象嵌銘文大刀 (表3・図5)

中国では春秋戦国時代の銘文象嵌銅剣を多く見る。湖北省江陵県望山1号楚墓から発見された「越王鳩浅自作用劍」の銘のある越王勾踐劍、湖北省江陵県の楚墓から発見された「攻吾王夫差自乍其元用」の銘のある呉王夫差劍、湖北省随県曾侯乙墓の「曾侯乙之寢戈」等の銅戈、中国故宮博物院の吉日劍などが知られるが、その多くは劍・戈の所有者を示すもので

図4 韓国・三国時代の象嵌銘文大刀



13 有銘環頭大刀 14 有銘円頭大刀

表3 中国の象嵌銘文大刀

名 称	発 見 地	刀 剣・銘 文	製 作 地・年 代
18 東漢建初二年五十 凍鋼劍	江蘇省徐州市銅山縣駝 竜山南坂・磚室墓	残存長 109cm 茎に21字の金象嵌	蜀郡西工官（四川省西 都） 東漢建初2年（77）
19 東漢永初紀年鉄刀	山東省臨沂地区蒼山県 卞荘	全長 111.5cm 棟に15字の金象嵌	東漢永初6年（112）
20 金錯書刀	四川省西都市天廻鎮天 廻山3号崖墓	全長 18.5cm 茎に24字の金象嵌	廣漢工官 光和7年（184）

ある。ここでは、漢代以降の鉄製象嵌銘文大刀について概観する。

⑱ 東漢建初二年五十凍鋼劍

江蘇省徐州市銅山縣駝竜山南坂の漢代磚室墓から1978年に発見された鉄劍である。劍先が少し失われているが残存する長さは109センチメートル、劍身の長さは88.5センチメートル、茎の長さは20.5センチメートルを計る。劍の茎の部分に

建初二年蜀郡西工官王愷造五十凍□□□孫劍□

の21字が隸書体で金象嵌されている。

東漢（後漢）の建初2年（77）に四川省成都にあった鉄器製作工房である蜀郡西工の工匠王愷が念入りに鍛え作り上げた劍であることを記す。読み取ることのできない3～4字は劍の優秀性を示す句か吉祥句であった可能性が強い。

この劍は、被葬者の左脇に添えて発見され、他に鉄刀2、鉄戟1、銅鏡1、五朱錢・貨錢78枚などが出土している⁽²⁸⁾。

⑲ 東漢永初紀年鉄刀

山東省臨沂地区蒼山県卞荘で1974年に水利工事中に発見された、全長111.5センチメートルの僅かに内反りのある素環頭大刀である。幅1センチメートルの刀の棟の火焰文象嵌のあとに

永初六年五月丙午造世凍大刀吉羊

の15字が隸書体で金象嵌されている。

東漢（後漢）の永初6年（112）5月丙午（5月5日）の吉日に念入りに鍛え上げた刀である。これを佩用するものには吉祥がもたらされる、との銘文である。

奈良県東大寺山古墳から発見された漢中平紀年大刀の「中平□年五月丙午造作支刀百練清剛上應星宿下辟不祥」と酷似する⁽²⁹⁾。

⑳ 金錯書刀

四川省西都市天廻鎮の天廻山3号崖墓から1957年に鉄道建設工事の際に発見された。天廻

図5 中国の象嵌銘文大刀



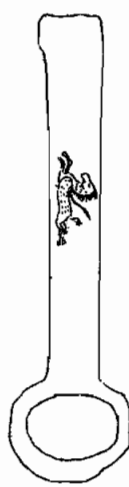
18

18 東漢建初二年五十
煉鋼劍
(註28より作図)



19

19 東漢永初紀年鉄刀
(註29より作図)



20 金錯書刀
(註30, 31より
作図)



21

21 貞松銅金吉凶所載 東漢永
元紀年書刀 (华党明『中国
古代金属技術』より)



20

山3号崖墓は、左右に7ヵ所の玄室をもつ双翼式崖墓で、玄室内の石棺から金錯書刀が発見された。書刀は全長18.5センチメートル、幅1.5センチメートルを計る素環頭小刀で、茎の表に銘文、裏に鳳凰文が金象嵌されている。銘文は

光和七年廣漢工官十凍書刀服者尊長保子孫宜侯王富貴

の24字が隸書体で金象嵌されている。

光和7年(184)に廣漢工官によって鍛え造られた書刀である。これを持つ者は尊ばれ長く子孫は保つ、王に宜しく富貴となることを願う、と記す。^(30・31)

これと酷似する素環刀の書刀が『貞松堂吉金図』巻下に3例あり、その1例の柄に「永元十六年廣漢郡工官卅練書刀工馮武」の銘が見られる。永元は東漢(後漢)和帝の年号で十六年は西暦104年にあたる。

4 象嵌銘文大刀の象嵌技法と元素分析

1978年に稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣の保存処理・修復とそれに伴う科学調査が行われて多くの成果が得られたのを契機にして、その後、多くの象嵌大刀の技法の研究と組成成分の分析が行われるようになった。ここでは象嵌銘文大刀と象嵌技法を同じくする象嵌文様大刀の例をも含めX線写真撮影や電子顕微鏡、X線分析装置などを使った調査の成果について検討する。

(1) 象嵌の技法

我が国で知られている古墳時代の象嵌銘文大刀と象嵌文様大刀は約300例に及ぶが、象嵌はすべて糸象嵌の技法である。象嵌のX線透過写真、破損面に見える象嵌の断面、脱落した象嵌線、象嵌溝などの顕微鏡観察から糸象嵌の技法を読み取ることができる。辛亥銘鉄剣の金象嵌線は断面逆三角形、彫り溝は断面V字形で、曲線部分では溝の底が小刻みに屈曲したり、撚り糸様になっている(図6)。兵庫県勝福寺古墳北墳の円頭大刀柄頭の金象嵌線、鳥取県西穂波C3号墳の頭椎大刀柄頭の銀象嵌線、三重県垣内田古墳の円頭大刀柄頭・鞘尻の銀象嵌線、そして、岡山県柳谷古墳の頭椎大刀柄頭の銀象嵌線もまた、断面逆三角形で、垣内田古墳の円頭大刀の柄頭の銀線の底面は節枝状になっていて、鑿の運びが良く見える(図7)。すなわち、糸象嵌の技法は線彫り鑿で一打ずつ鑿を進めて断面はV字状、平面は節枝状の溝を彫って文字・文様を刻み、その溝に金・銀・銅の細線を鑿と槌で打ち嵌め、象嵌溝両側のかえりを内側に折り倒し、鑢と砥石で研ぎ仕上げをする工程で進めた様子が判明する(図8)。

しかし、同じ糸象嵌技法にあっても、鑿一打の運びの長さや象嵌線の幅に差異をみいだす

ことができる。漢中平紀年大刀と七支刀は、元来伝世を意図して造られて幾度かの研磨を経ているものと思われるが、鑿一打の長さは1.0～1.2ミリメートル、復原できる象嵌線の幅は1.0ミリメートル以下と推測できる。辛亥銘鉄剣、額田部臣銘大刀、戊辰銘大刀は、被葬者の生前の功績を讃える記念碑的な大刀で、製作後程なく副葬されたものと考えられよく原状を保ち、鑿一打の長さは1.0～1.2ミリメートル、象嵌線の幅は1.0ミリメートル前後をはかる。瀧瀬芳之・野中仁氏の研究によると、埼玉県下発見の象嵌大刀の象嵌線23例についてその幅を測定したところ、細いもので0.2～0.6ミリメートル、太いもので0.6～0.9ミリメートルを計り、必ずしも厳密に一定の幅とは言えない⁽¹⁶⁾。象嵌線の幅は象嵌後の仕上げの研磨の程度、銀・銅象嵌の場合は埋蔵中の腐食によって、残存幅が違ってくる。

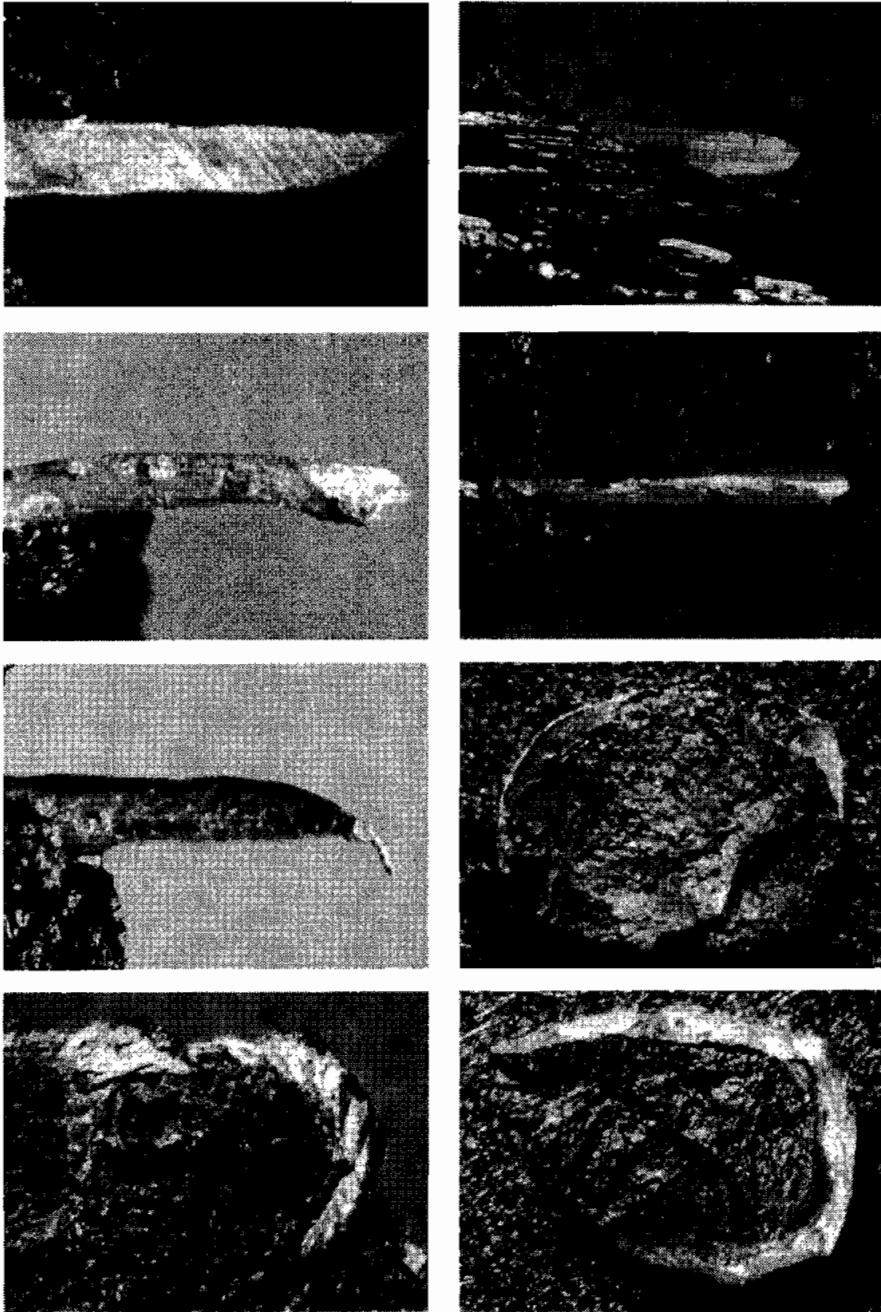
しかし、線彫りの鑿一打の長さは、象嵌時のまま今も残り、技法変遷の手掛かりとなる。ちなみに、飛鳥時代の四天王寺・七星剣の鑿一打の長さは0.4～0.5ミリメートル、奈良時代の三寅劔の鑿一打の長さは0.4～0.5ミリメートル、象嵌線の幅は0.25ミリメートル、室町時代の禰祭劔の鑿一打の長さは0.4～0.5ミリメートル、象嵌線の幅は0.5ミリメートルを計り、古墳時代の象嵌大刀の鑿一打の長さの1.0～1.2ミリメートルとは、際立った差異をみせる。象嵌技術は古墳時代と飛鳥・奈良時代を境にして、より細密な線画や文様表現を可能にする技術的革新があったものとみられる（表4）。

（2）象嵌線の元素分析

非破壊分析に適した蛍光X線分析装置やX線マイクロアナライザー装置が普及するにしたがって、象嵌銘文大刀や象嵌文様大刀の象嵌線の元素分析が可能になって多くのデータが蓄積されるようになってきた。そして、象嵌線の金属種や合金比に特色のあることが判ってきた。

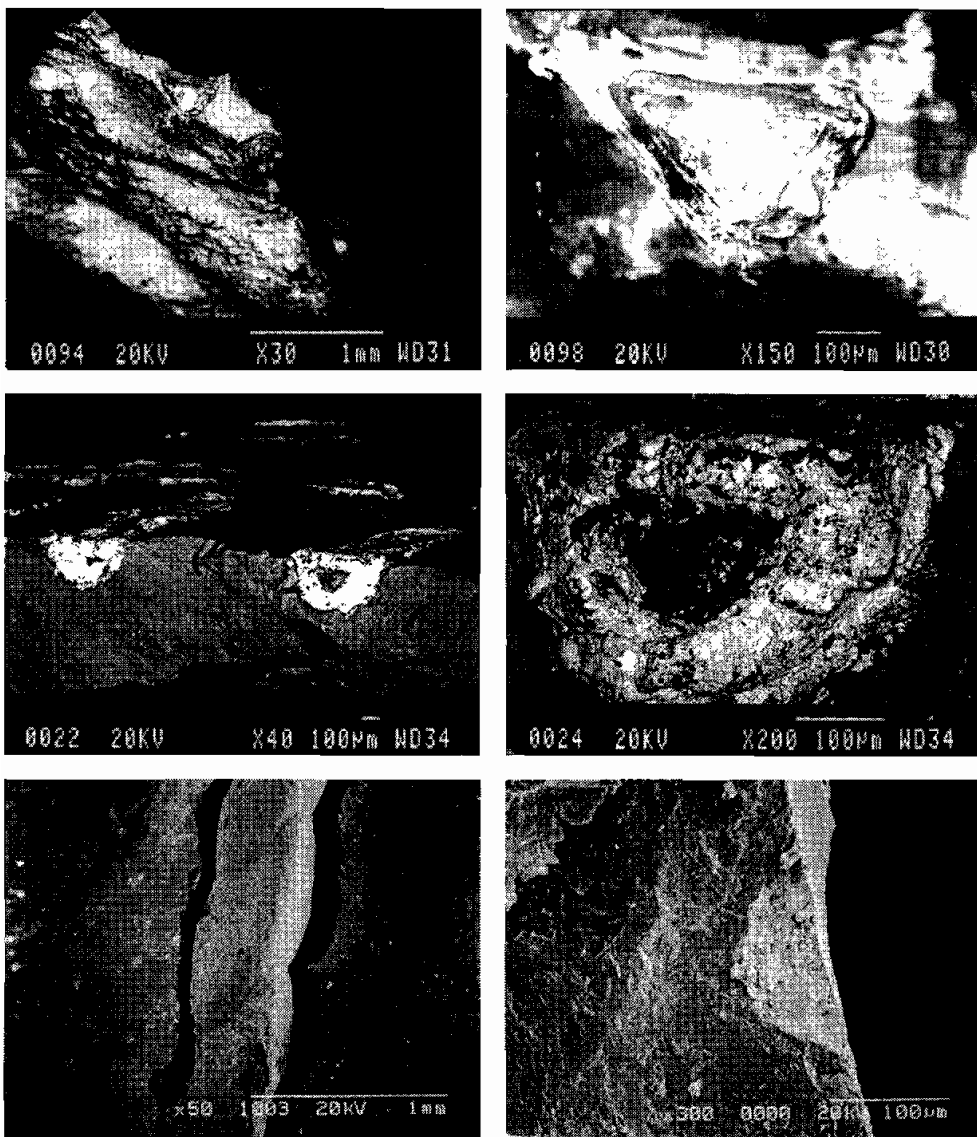
辛亥銘鉄剣の象嵌線は蛍光X線分析と中性子放射化分析によって金約73%と銀約27%（17.5金）の合金であることが確かめられ、美しいやまぶき色の輝きを保ちつつ、象嵌するに適した粘りと硬さであることが判った⁽⁴⁾。七支刀の象嵌線は金79.2%（19金）の高純度であると公表されたが、他の成分は不明である⁽⁴⁶⁾。額田部臣銘大刀の象嵌線は、X線マイクロアナライザーで分析した結果、銀・塩素・鉄・アルミニウムが検出され、地金の鉄と銀鍍（塩化銀）の塩素と土壌成分のアルミニウムを除くと銀のみが残り、定量分析は行っていないものの銀濃度は100%に近いものであろうと思われる（図9）。額田部臣銘大刀の円頭柄頭の亀甲繫双鳳文の象嵌線も、同様のデータが得られている⁽³⁶⁾。戊辰銘鉄刀の象嵌線は銅で、その濃度は100%に近いものが使われている⁽⁶⁾。東京国立博物館所蔵の韓国三国時代の有銘環頭大刀の象嵌線の蛍光X線分析でも銀と鉄が検出されたが、鉄は鉄刀身の鍍の影響と考えられ、象嵌線はほぼ純銀であることが推測される⁽⁴⁵⁾。

図6 辛亥銘鉄剣の象嵌線



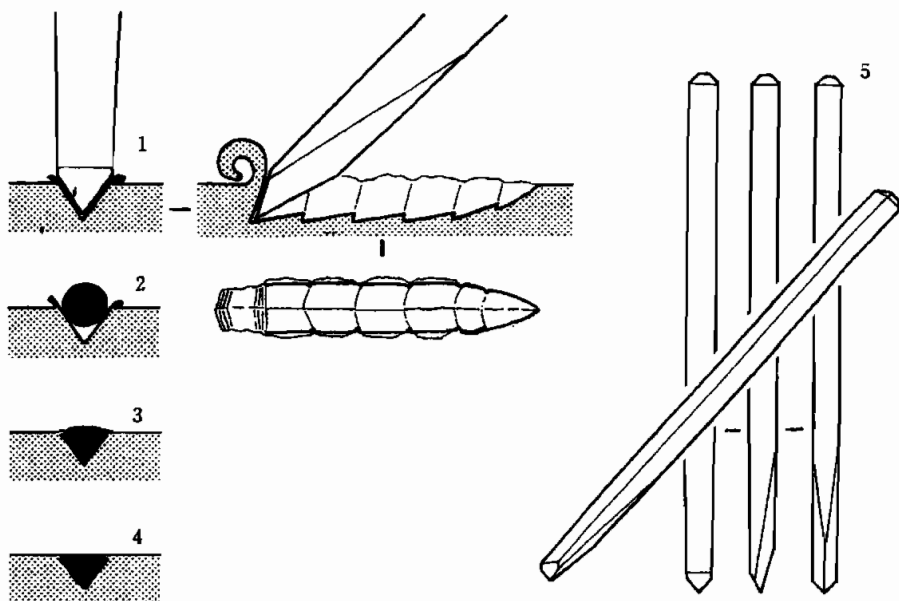
左列上より直線部分の表面・側面・裏面と曲線部分の裏面
右列上より直線部分の表面・裏面と曲線部分の表面・裏面

図7 象嵌文様大刀の象嵌線



上・兵庫県勝福寺北墳円頭柄頭の象嵌線の断面
中・鳥取県西穂波C3号墳頭椎大刀柄頭の象嵌線断面
下・三重県垣内田2号墳円頭大刀柄頭象嵌線の裏面（左）と同鞘尻の象嵌線断面（右）

図8 糸象嵌技法模式図



象嵌技法(糸象嵌) 1 彫り鑿で象嵌溝を彫る 2 象嵌線を溝に嵌める 3 象嵌溝の両側のカエリを内側に折り象嵌線をタタキ込む 4 鋸で研いで仕上げる 5 彫り鑿

表4 象嵌銘文大刀・象嵌文様大刀の鑿彫りと象嵌線幅

銘文大刀の名称	鑿一打の長さ (mm)	象嵌線の幅 (mm)
漢中平紀年大刀 (金象嵌)	1.0~1.2	0.5~0.8
七支刀 (金象嵌)	1.0~1.2	0.4~0.5
辛亥銘鉄剣 (金象嵌)	1.0~1.2	0.8~1.0
銀象嵌大刀 (銀象嵌)	1.0	0.5~0.6
額田部臣銘大刀 (銀象嵌)	1.0	0.7~1.2
戊辰銘大刀 (銅象嵌)	1.0~1.1	0.3~0.5
有銘圓頭大刀 (金象嵌)	1.0~1.2	0.7~0.9
有銘環頭大刀 (銀象嵌)	0.8~1.0	0.9~1.0
四天王寺七星剣 (金象嵌)	0.4~0.5	
三寅劔 (金銀象嵌)	0.4~0.5	0.25
馮祭劔 (金銀象嵌)	0.4~0.5	0.5以下

鑿一打の長さは直線またはゆるやかな曲線部分の計測による

象嵌文様大刀の象嵌線の組成分析でも多くのデータが得られている。奈良・星塚2号墳の円頭柄頭の亀甲繫双鳳文は、鉄地に金と銀の2種類の金属で文様を象嵌する極めて稀な例である。亀甲繫の繫線と亀甲隅の二重円の外円は金象嵌で、この部分のX線マイクロアナライザーによる分析の結果は、金・銀・鉄・珪素・アルミニウムが検出され、地金の鉄と土壌成分の珪素・アルミニウムを除くと金と銀が残る。元素の定量は行っていないが、金の濃度が高い銀との合金であることがわかる。また、二重円の内円と双鳳文(双鳥文)は銀象嵌で、分析の結果、銀・鉄・珪素・アルミニウム・塩素が検出され、地金の鉄と土壌成分の珪素・アルミニウム、銀鍍である塩化銀の塩素を除くと銀のみが残り、純銀に近いものであることが判る。(註36・図10)。勝福寺古墳北墳から発見された円頭大刀柄頭の僅かに残された金象嵌線のX線マイクロアナライザーによる分析では、金・銀・鉄が検出され、鉄鍍の影響を除くと金90%、銀10%となり金と銀の合金であることがわかる(図11)。また、同古墳の象嵌大刀巾頭の銀象嵌龍文線の分析では、銀・鉄・珪素・アルミニウム・塩素が検出され、地金の鉄と土壌成分の珪素・アルミニウム、銀鍍である塩化銀の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀といって良いであろう。

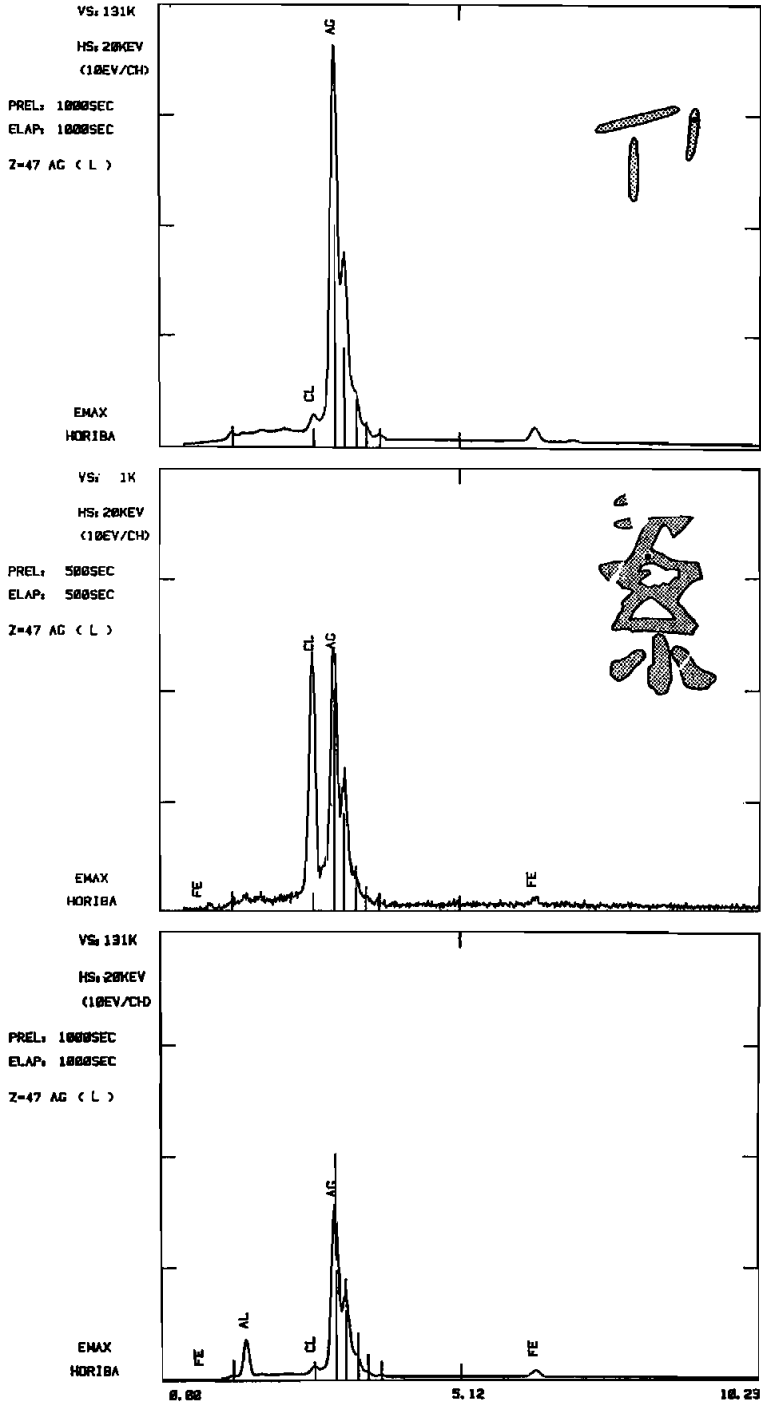
柳谷古墳の頭椎大刀の亀甲繫渦文柄頭の象嵌線をX線マイクロアナライザーを使って定量分析を行った結果、銀98.2%、鉄1.27%、酸素0.52%の値を得、また、同大刀の鞘尻の象嵌線は銀90.89%、鉄5.85%、のほか珪素、酸素の値を得た(図12)。両資料ともに地金に由来する鉄、土壌に由来する珪素・アルミニウムを除外すると、純度100%に近い銀であることが判明する⁽⁴⁷⁾。

垣内田2号墳出土円頭大刀柄頭の象嵌線の定量分析では、銀96.52%、鉄1.18%、アルミニウム0.94%、塩素0.61%、珪素0.52%、銅0.21%の値を得た。また、鞘尻金具の銀象嵌線の定量分析では、銀94.07%、塩素2.41%、鉄1.42%、銅0.91%、アルミニウム0.82%、珪素0.39%の値を得た。両資料ともに地金に由来する鉄、土壌に由来する珪素・アルミニウムと塩素を除外すると、銅を微量に含む純度100%に近い銀であることが判明した⁽⁴⁸⁾。

長野県本郷大塚古墳出土円頭大刀柄頭では、銀・鉄・珪素を検出し、鉄地に由来する鉄、土壌に由来する珪素を除外すると、ほぼ100%の銀であることが判明する⁽⁴⁹⁾。大阪府山畑22号墳の円頭大刀柄頭の象嵌線の分析では、銀・鉄・珪素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地の鉄と土壌成分の珪素・アルミニウム、銀鍍である塩化銀の塩素を除くと銀が残る。ほぼ純銀である⁽⁵⁰⁾。鳥取県西穂波C3号墳出土の頭椎大刀の亀甲繫渦文柄頭の象嵌線の分析では銀・鉄・珪素・アルミニウム・塩素が検出され、鉄地と土壌成分の珪素・アルミニウム、銀鍍の塩素を除くと銀が残る⁽⁵⁰⁾。ほぼ純銀である。

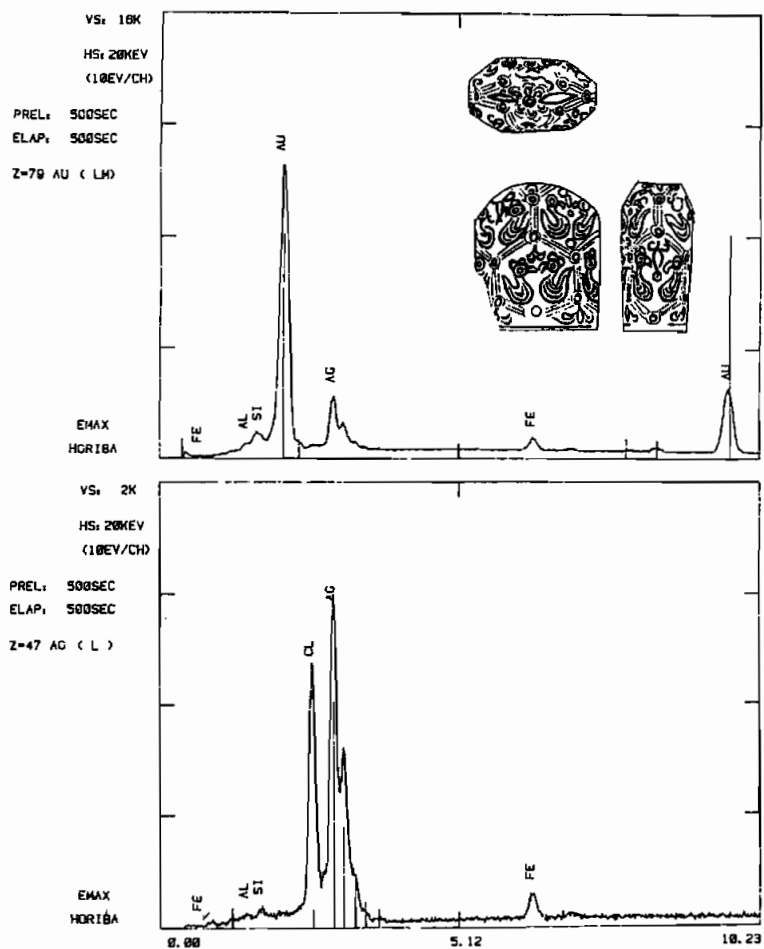
三重県前山古墳円頭大刀の亀甲繫心葉文柄頭と鞘尻の銀象嵌分析⁽⁵¹⁾や兵庫県庄境1号墳の大刀鐔の象嵌の分析⁽⁵²⁾でも、同様にほぼ100%近い純度の銀を使用しているとの結果が示されて

図9 額田部臣銘大刀の象嵌線の分析



上・「部」字、中・「素」字（・印が分析位置）
 下・円頭柄頭の象嵌線

図10 星塚2号墳円頭大刀柄頭の象嵌線の分析



上・金象嵌部分、下・銀象嵌部分

図11 勝福寺北墳円頭大刀柄頭の象嵌線の分析

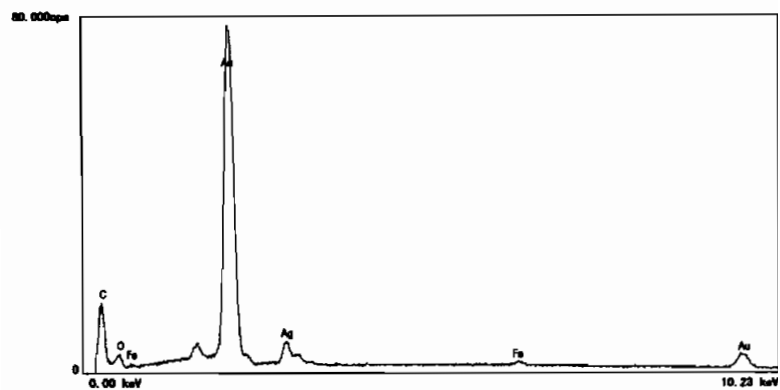
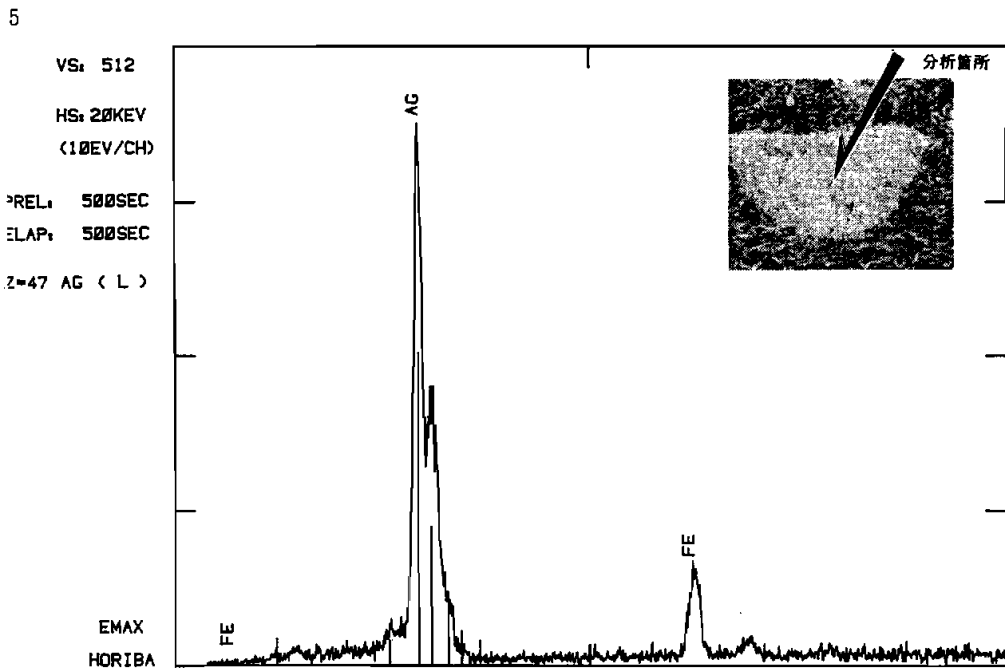
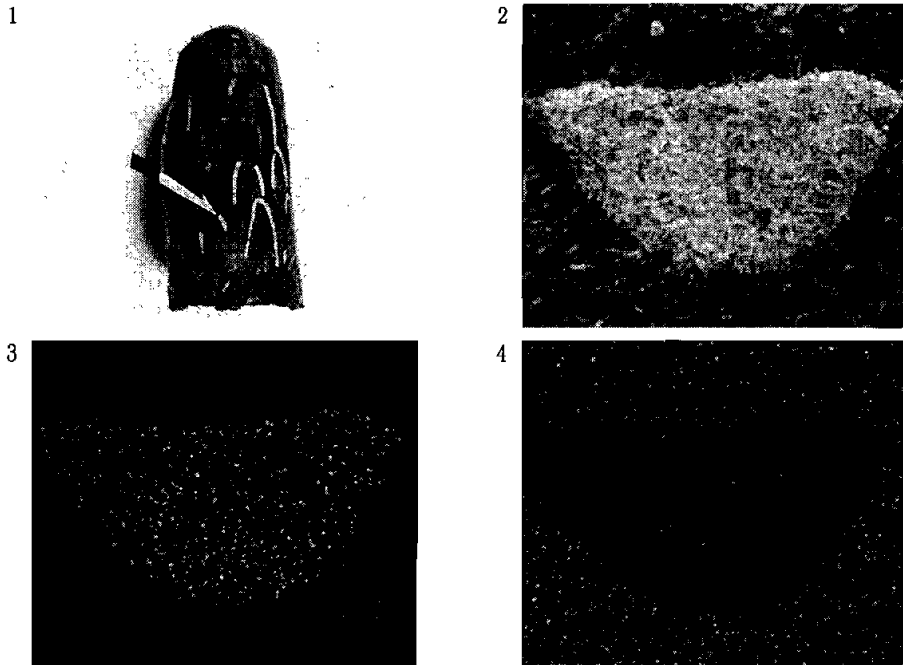


図12 柳谷古墳頭椎大刀の鞘尻の象嵌線の分析



1 分析位置 2 象嵌線断面の二次X線像 3 同前の銀分布
 4 同前の鉄分析 5 象嵌線の分析チャート

いる。

韓国の三国時代の象嵌大刀の象嵌技法と象嵌線の元素分析を李午熹氏の研究⁽²⁶⁾を参照に検討する。韓国の象嵌大刀17例もすべて糸象嵌技法によるものである。象嵌線の断面は、顕微鏡観察によって陝川玉田67-A号墳象嵌大刀・伝安康象嵌大刀・出土地不明の鉄製銀象嵌蓮弁文円頭大刀・出土地不明の鉄製金象嵌波状線文大刀の何れも、断面が逆三角形であることが確認されている。また、象嵌線の金属種は、金象嵌の石上神社七支刀・昌寧校洞11号墳象嵌大刀・出土不詳象嵌大刀、金・銀を組み合わせる伝新鳳洞象嵌大刀・南原月山里M1-A号石室象嵌大刀・壺杆塚象嵌大刀と、二色の対比を意図して銅象嵌の一部に金箔を被せている昌原道溪洞6号墳象嵌大刀、その他8例の象嵌大刀は銀象嵌である。

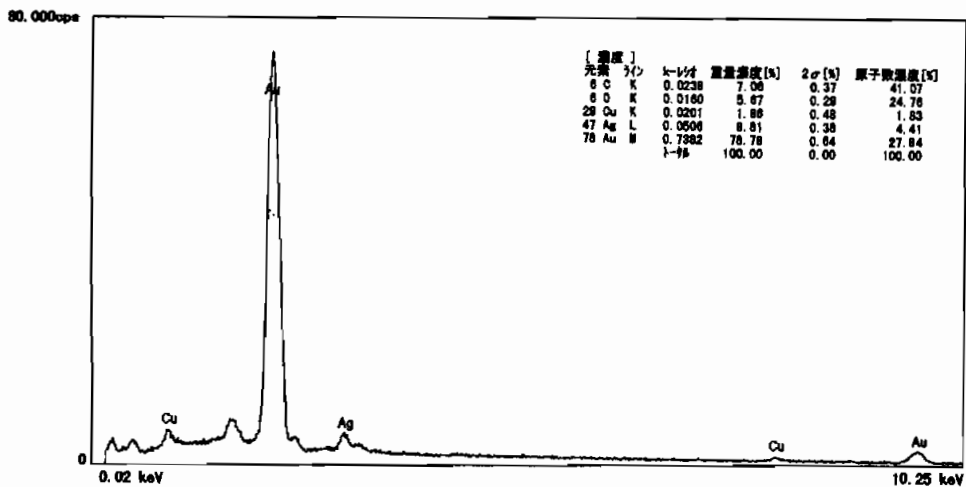
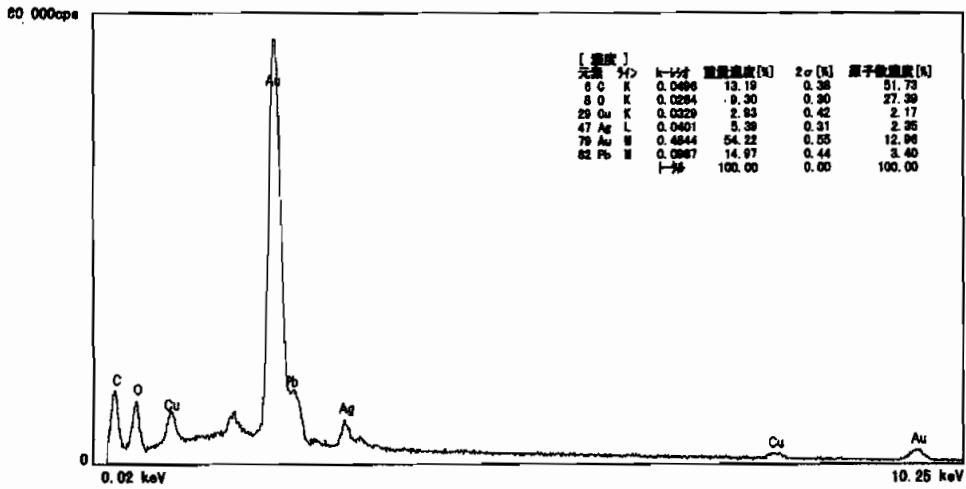
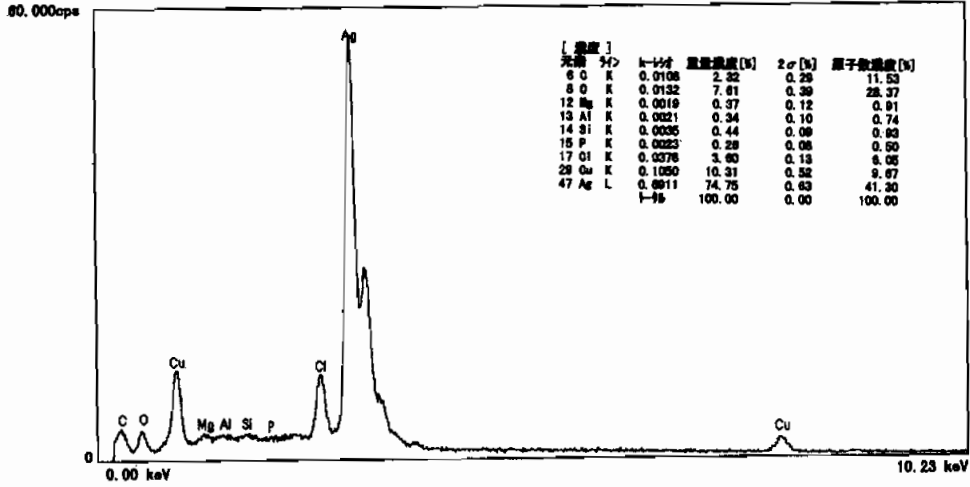
象嵌線の元素組成の明らかな例は、伝・昌寧出土の有銘龍鳳文環頭大刀で100%に近い純銀を使用している。伝・清州新鳳洞象嵌大刀は金・銀を使用、出土地不明の鉄製金象嵌波状線文大刀（湖巖美術館所蔵）では、金と銀の合金比が6.1~6.3 : 3.8~3.6の金銀の合金を使用、昌原道溪洞6号墳象嵌大刀の環頭の象嵌線は銅99%と銀1%の純銅に近いもの、そして一部でその上に金96.6%・銀2.6%・銅1%未満の金箔を貼った部分があるという。このように韓国の象嵌大刀の分析例は少ないものの、金象嵌は金に銀を加えた合金であること、銀象嵌と銅象嵌はほぼ純銀と純銅であることが窺い知れる。

中国の象嵌銘文大刀の象嵌線の元素分析は行われていないので、戦国時代~漢代の銅製帯鉤4例の分析例を取り上げる。帯鉤1は銅地鳳凰文銀象嵌帯鉤（糸象嵌）、帯鉤2は銅地幾何文金・玉象嵌帯鉤（平象嵌）、帯鉤3は銅地幾何文金・玉象嵌帯鉤（糸・平象嵌）、帯鉤4は銅地幾何文銀象嵌帯鉤（糸象嵌）で、それぞれの金属象嵌線のX線マイクロアナライザー分析を行った。帯鉤1と帯鉤4は、錆の原因の塩素、酸素などを差し引くと、100%に近い高純度の銀を使用していることがわかる。また、帯鉤2と帯鉤3は錆の酸素などを差し引き金と銀の比を取ると、帯鉤2は金90.4%、銀9.6%となり帯鉤3は金92.8%、銀7.2%となり、ともに21金の純度にあたる（図13）。

以上の20数例の象嵌線の元素分析の結果を総合すると、文字象嵌と文様象嵌に共通して銀象嵌はほぼ純度100%に近い銀を使い、銅象嵌もほぼ純度100%に近い純銅を使っていることが判る。ただ、金象嵌の場合は金濃度が90%以上、80%前後、70数%の3種類の金線が使われていて、中国または中国に近い地域程に金の純度が高いことが判る（表5）。

日本・中国・韓国の象嵌銘文大刀・象嵌文様大刀の象嵌鑿の運び一打の長さや象嵌線の幅、金象嵌の金と銀の合金比率の違い、銀象嵌の純銀の使用、銅象嵌の純銅の使用の共通性、金と銀と銅の金属種と色彩の明瞭な使いわけなどに、時代と地域の特徴と規則性を見出すことができる。

図13 中国帯鈎の象嵌の分析



上・帯鈎1、中・帯鈎2、下・帯鈎3

表5 象嵌銘文大刀・象嵌文様大刀の象嵌線の組成成分

銘文大刀	象嵌線の組成成分比(%)								備考	
	金 (Au)	銀 (Ag)	銅 (Cu)	鉄 (Fe)	アルミニウム (Al)	珪素 (Si)	塩素 (Cl)	その他		
漢中平紀年大刀									中国後漢製・2世紀・金象嵌	
七支刀	79.2								韓国百濟製・4世紀・金象嵌	
『塵袋』護身劍									韓国百濟製・3~4世紀・金象嵌	
王賜銘鉄劍									日本製・5世紀・銀象嵌	
辛亥銘鉄劍	73	27	○	-	-	-	-	-	日本製・5世紀・金象嵌	
銀象嵌大刀	-	◎	-	○	-	-	-	-	日本製・5世紀・銀象嵌(純銀)	
額田部臣銘大刀	銘文	-	◎	-	○	-	-	○	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
	円頭柄頭	-	◎	-	○	○	-	○	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
戊辰銘大刀	-	-	◎	-	-	-	-	-	日本製・7世紀・銅象嵌(純銅)	
金錯銘直刀									日本製・7世紀・金象嵌?	
丙子椒林劍									?・7世紀・金象嵌	
三寅劔	金象嵌線	96~97	4~3	-	-	-	-	-	-	?・8世紀・金銀象嵌
	銀象嵌線	-	95~97	5~3	-	-	-	-	-	
坂上田村麿將軍劍									日本製・9世紀・金象嵌	
相應和尚劍									ペルシヤ製?中国製?・9世紀・金象嵌	
流麿寺鉄劍									日本製?・9~11世紀・銀象嵌	
襦祭劍									日本製・14~16世紀・金銀象嵌	
星塚古墳円頭柄頭	亀甲線	◎	○	-	○	○	-	-	-	日本製・6世紀・金象嵌
	鳳凰文	-	◎	-	○	○	○	○	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
勝福寺古墳北墳	円頭柄頭	78.95	15.79	-	5.25	-	-	-	-	日本製・6世紀・金象嵌
	鞘口金具	-	◎	-	○	○	○	○	硫黄	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
柳谷古墳	頭椎柄頭	-	98.2	-	1.3	-	-	-	酸素0.5	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
	円頭柄頭	-	90.9	-	5.9	0.2	0.2	-	酸素2.9	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
垣内田2号墳	円頭柄頭	-	96.5	0.2	1.2	0.9	0.5	0.6	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
	鞘尻金具	-	94.7	0.9	1.4	0.8	0.4	2.4	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
本郷大塚	円頭柄頭	-	◎	-	○	-	○	-	-	日本製・6世紀・銀象嵌(純銀)
山畑22号墳	円頭柄頭	-	◎	-	○	○	○	○	-	日本製・6・7世紀・銀象嵌(純銀)
西穂波C3号墳頭椎柄頭		-	◎	-	○	○	○	○	-	日本製・7世紀・銀象嵌(純銀)
韓国・有銘環頭大刀		-	◎	-	○	-	-	-	-	韓国・5~6世紀・銀象嵌(純銀)
韓国・有銘円頭大刀										韓国・5~6世紀・金象嵌
中国・帯鈎1	-	74.75	10.31	-	0.34	0.44	3.60			中国・戦国一漢銀象嵌
中国・帯鈎2	54.22	5.39	2.93	-	-	-	-	鉛14.97など		中国・戦国一漢金・玉象嵌
中国・帯鈎3	78.79	6.81	1.66	-	-	-	-			中国・戦国一漢金・玉象嵌
中国・帯鈎4	-	65.71	3.76	-	0.15	0.35	9.17	鉛4.61など		中国・戦国一漢銀象嵌

◎ 最も多く存在する元素 ○ 検出された元素 - 検出されない元素 空欄は未分析

5 小海町・島山家伝来の三寅劔

(1) 三寅劔の象嵌文字・文様

長野県南佐久郡小海町の旧家島山理介氏宅には「三寅劔」銘の象嵌大刀が伝えられている。1938年（昭和13年）奇しくも戊寅の歳に金工作家であり研究家でもある香取秀真氏がこの劔を調査し、金工研究史上貴重な資料であることを認めて大切に保管するようにと指示された記録が残されている。それからおよそ半世紀後の1993年秋に水野正好氏によってその価値が再び見いだされ、小海町に同氏を委員長とする三寅劔調査検討委員会が設けられてさらに詳しい検討がなされ、三寅劔は7～8世紀の象嵌大刀であることが認められた⁽⁴⁰⁾。

三寅劔は僅かに内反りのある鑄造りの小刀である。刃には研ぎ減りが見られ茎は目釘穴から先端をわずかに欠失するが、往時の形態を良く残している。現存の長さ34.5センチメートル、刃わたり25.4センチメートル、関近くの最大幅2.8センチメートル、棟の最大厚0.6センチメートル、重量151.72グラムを計る。

この、刃わたり25.4センチメートルの間に、この大刀の名となっている「三寅劔」の銘のほか梵字・星辰・天部像・連続S字状文・直線等が大刀全面に金銀象嵌されていて、前例のない内容豊富な新資料として注目されている（図3・14）。

① 棟の象嵌

幅2.5～6.5ミリメートルの棟に先端から緩やかに蛇行する曲線、直線、波状線、鋸歯状線、逆S字状連続線が両側に直線（圏線）を伴って関近くまで連なっている。研ぎ減りの為に文様線が消滅したり、線幅が減じてはいるものの、残存する銀象嵌文様線の幅は0.2ミリメートル、両側の圏線の鑿彫り一打の長さは約0.5ミリメートルを計る、非常に繊細なものである。

これらの文様線と一線で画された関までの長さ2.7センチメートルの部分に三寅劔の銘がある。象嵌線が脱落して楔状鑿彫りが列点に連なったり、象嵌線が楔状の列点の状態で残存する部分があるものの、この劔の最も大切な部分であるとの意識があつてのことであろう、研ぎに際しても格段の注意がはらわれたと見られ、他の象嵌部分に比して研ぎ減りは少ない。

文字は銀の象嵌によって書かれ、その線画の最大幅は約0.25ミリメートル、鑿一打の長さは0.4～0.5ミリメートルを計る。

② 佩表の象嵌

三寅劔の佩表には、先端より意味不明の文様、星辰（星座）、天部像、棟に平行した直線が象嵌されている。

先端の意味不明の文様は研ぎ減り激しく、雲形の様な、天衣の様な鑿彫りの跡が残るのみ

である。

星辰は、○で表現する銀象嵌の星と、星と星を結ぶ金象嵌の繫線が研ぎ減りによって磨滅している部分が多い。列点状に残存する鑿彫りや象嵌を丹念に検討した結果、三公・三台・北斗七星の三星辰が描かれていることが判明した。三公は三星をV字型に繋ぐ形が普通であるが、三寅劔では二星一組にしてV字型に繋いでいる。中国・唐代編修（627～649年編修）の『晋書天文志』および北宋代編修（1086～1093年編修）の『新儀象法要』蕪頌星図によると、北斗七星のそばに三公が2ヵ所にあると記されていることから、これらを一つにまとめたものと思われる。また、三台・北斗七星が裏返しに描かれているのは四天王寺七星劔等にも見られる。三公・三台・北斗七星を揃って象嵌する刀劔は、四天王寺七星劔、正倉院七星劔、法隆寺七星劔等に類例を見ることができる（図15）。

『晋書天文志』によると、三公は徳にもとづく教化をひろめ、日月五惑星の運行を調整し、陰陽を調和させるのが仕事の官である。三台は徳を敷き、瑞象をつたえ、陰陽を調和させ、万物を秩序づける役割をもつ。北斗七星は天の中央を運って四方を治め、四季を定めて五行を整える。つまり、天上世界の天帝が北極星にあてられ、天帝が天上世界を恙なく治めるために、その運行を司ったり補佐役をなすのが三公・三台・北斗七星である。三寅劔の三公・三台・北斗七星には、地上世界における徳、陰陽の調和、万物の秩序を司る役割が期待されているのである。

星の繫線の最大幅は0.2ミリメートル、鑿彫りの一打は長さ0.4ミリメートルであるのに比して、直径2～2.5ミリメートルの小円で描く星の鑿彫りの一打は長さ0.2ミリメートルと短い。滑らかな円曲線を描くために、鑿彫りの一打を二分の一に、回数を二倍にし小刻みに行っている。

佩表の関近くの像も、他の文様と同様に研ぎ減りが激しく描線は僅かしか残らないが、列点状の鑿彫りや象嵌を丹念に検討した結果、目・鼻・口・髪などを詳細に描き、甲、襟甲、肩甲を纏って左手に戟を、右手のひらに何か（宝塔か）を乗せ、天衣が翻り、火焰円形光背を持つ天部様の像が復原された。前方下腹部を保護する前楯の無いこと、襟甲・肩甲が大きいことなどの特色から、中国・唐代初期風の多聞天像（毘沙門天像）と推測されている。

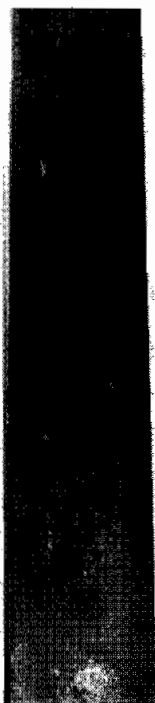
多聞天像のうち、顔の輪郭・天衣・戟を金象嵌で、他を銀象嵌で描き、金銀象嵌ともに最大幅は0.25ミリメートル、鑿彫り一打の長さは0.4ミリメートルを計る。

棟に並行する直線は切っ先より約三分の一が残るだけである。星辰が刃幅中央よりも刃部よりに位置すること、多聞天像が刃幅の中央に位置することから、この直線は多聞天像光背付近まで延びていたものと思われる。鑿彫りの楔形列点とその所々に象嵌銀が残り、鑿彫り一打の長さは0.5ミリメートルを計り、他に比してやや長い。

図14 畠山家伝来の三寅劔



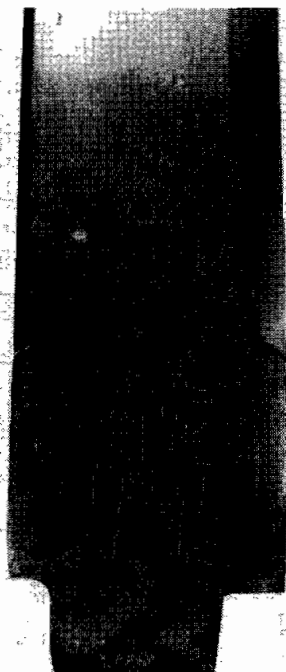
棟・「三寅劔」銘



佩表・星辰



佩裏・持国天像

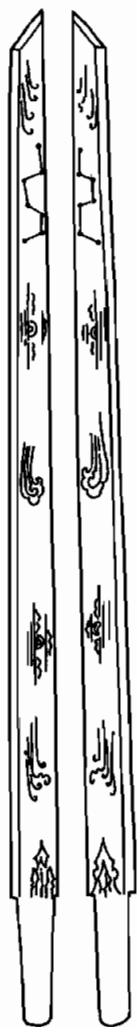


佩表・多聞天像

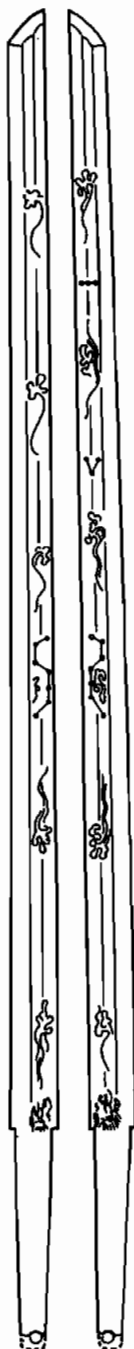


佩表

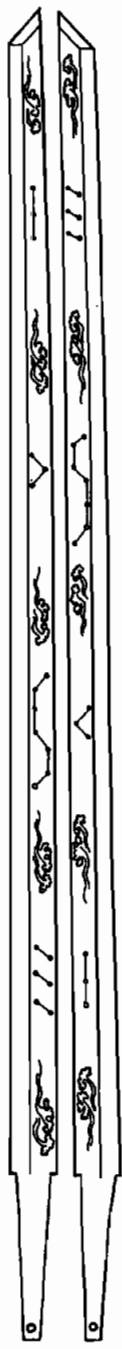
図15 日本の七星剣



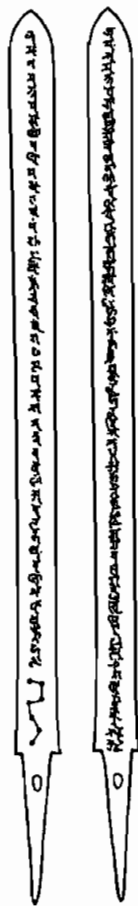
法隆寺多聞天持物
線刻 五八 cm



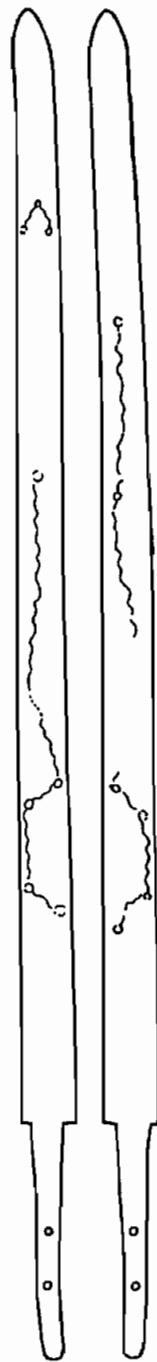
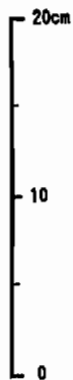
四天王寺
金象嵌 七四 cm



正倉院呉竹鞘杖刀
金象嵌 七四 cm



上杉神社橋祭剣
金銀象嵌 五〇 cm



一宮神社
銀象嵌 八二 cm

③ 佩裏の象嵌

佩裏は切っ先から関にむかって、意味不明の文様、梵字、天部様の像が並ぶ。意味不明の文様は、天部様にも、天蓋にも、日月文様にも見える。天部様とする意見は、佩表・佩裏の上下に四天王を描き四方の守りとしたのではないかとの推測による。この部分も鑿彫りの楔形列点とその所々に象嵌銀が残る程度であるが、鑿彫り一打の長さは直線部分で0.5ミリメートル、二重円の曲線部分で0.3ミリメートルを計る。

梵字は九文字が刻まれていたと思われる。鑿彫りの楔形の列点とその所々に象嵌線が残る程度で、第一字はオン、第二字はパと読むことが出来るが、他は判読出来ない。平安時代に密教とともに日本に伝来した梵字教典中には類似の真言を見い出せず、より古い形の真言であるかもしれない。梵字は輪郭を鑿彫りする籠書きの手法で刻み、銀象嵌を行っている。梵字の直線的な部分の鑿彫り一打の長さは0.5ミリメートル、曲線部分で0.3~0.2ミリメートルを計る。

佩裏関近くの像も、研ぎ減りが激しく描線は僅かしか残らないが、残存する鑿彫りや僅かな象嵌線を手掛かりに検討した結果、甲、襟甲、肩甲を纏って左手に矢を持ち右手を矢先に添え（あるいは弓を引く）、天衣が翻り、円形光背を持つ、細部を詳細に描く像が復原された。佩表の多聞天像と同様に前方下腹部を保護する前楯の無いこと、襟甲・肩甲が大きいことなどの特色から、中国・唐代初期風の持国天像と推測されている。

持国天像は、天衣を金象嵌で、他を銀象嵌で描くが、今は象嵌線の脱落している顔の輪郭や矢は多聞天像と同様に金象嵌であった可能性が高い。金、銀の象嵌はともに最大幅は0.25ミリメートル、鑿彫り一打の長さは0.4~0.5ミリメートルを計る。

佩裏には、棟に並行する直線は痕跡すら見当たらないが、意味不明の文様及び梵字真言が刃幅中央よりも刃部よりに位置すること、持国天像は刃幅の中央に位置することから、直線が持国天像光背付近まで延びていたものと推測される。

(2) 三寅劔のX線透過写真撮影、エミシオグラフィー、象嵌線の組成分析

三寅劔の製作技法などを解明するために、X線透過写真の撮影、エミシオグラフィーの撮影、そして象嵌線の元素分析を行った。

① X線透過写真撮影とエミシオグラフィー

三寅劔は、鉄製の刀に金・銀の象嵌が施されていて、鉄よりも銀のほうが質量が大きく、銀よりも金のほうが質量が大きいから、照射されたX線は金に多くを吸収されて透過量は少なく、銀は金よりも質量が小さいから吸収されるX線は少なくても透過量は大きく、金・銀よりも質量の小さい鉄では、吸収されるX線はさらに少なくても透過量は大きい。これらが、明暗の差となってフィルム上に像を写し出す。

しかし、実際に三寅劔のX線透過写真を撮ってみると、この理屈に反して象嵌文字・文様は辛うじてそれと理解できる程度で、鮮明には写し出されなかった。これは、鉄刀の地金が厚くて錆もなく健全であるのに対して、象嵌の金銀線は厚みがさほどなく、X線透過量に差がでないためである。

さて、X線を使ったもう一つの撮影方法である、エミシオグラフィーを試みた。エミシオグラフィーは、物質がX線を受けた時に新たに生じる二次X線をフィルムに写し取るものである。二次X線は質量の大きい物質ほど強いエネルギーとして現れるので、フィルムにはX線透過写真とは逆に、鉄よりも銀が、銀よりも金が黒く写し出される。

その結果、多聞天像のエミシオグラフィーを見ると、戟と顔輪郭と天衣が最も黒く濃く写り、その他の描線がややうすく写り、鉄刀身は更に淡く写っている。象嵌線が脱落し鑿彫りの痕跡が凹部として残っている部分は、鉄刀のバックと同様に透明で何も写っていない。しかし、肉眼では象嵌線が脱落し鑿彫りの痕跡だけが凹部として残っていると見えても、エミシオグラフィーには、黒く濃く、或いは、ややうすく写っている部分がある。これは、鑿彫りの痕跡凹部に金・銀が残存していることを示し、多聞天像の復原に大きな手掛かりとなった。⁽⁴⁰⁾

② 三寅劔象嵌線の元素分析

三寅劔の象嵌線の元素分析にあたっては、象嵌線の分析資料をサンプル採取できないこと、34.5センチメートルの長大な資料を収納可能な資料室をもつ装置が必要なことから、国立歴史民俗博物館情報資料研究部の齊藤努氏に分析をお願いした。

分析箇所は、金色部分の佩表の多聞天像の戟、佩表の星辰・三台の繫線、佩裏の持国天像の天衣、佩裏の意味不明像の4ヶ所、銀色部分の佩表の多聞天像の天衣、佩表の星辰・三台の星、佩裏の持国天像の鎧、佩裏の梵字第1字オーンと第2字バ、棟の三寅劔銘、棟の螺旋状文の7ヶ所、合計11ヶ所について行った(図16)。

その結果は、金色部分は96~97%の金に、4~3%の銀を混ぜた金銀合金であること、銀色部分が95~97%の銀に5~3%の銅を混ぜた銀銅の合金であることが判明した(図17・18)。棟の三寅劔の銘が他の銀象嵌部分に比べて残存状態が良いことに対して、佩表・佩裏の象嵌とは異なる時期に象嵌されたのではないかとの疑義もあったが、象嵌線の元素分析データは象嵌は全て一時になされたことを示している。また、金象嵌は金の濃度が高く、硬さを増すためであろうか意図的に銀を混ぜたこと、銀象嵌についても銀の濃度が高く、意図的に銅を混ぜていることが、この三寅劔の象嵌の特徴であり、その製作についての由来を示しているものと思われる。

図16 三寅劔の象嵌線の分析位置と分析結果

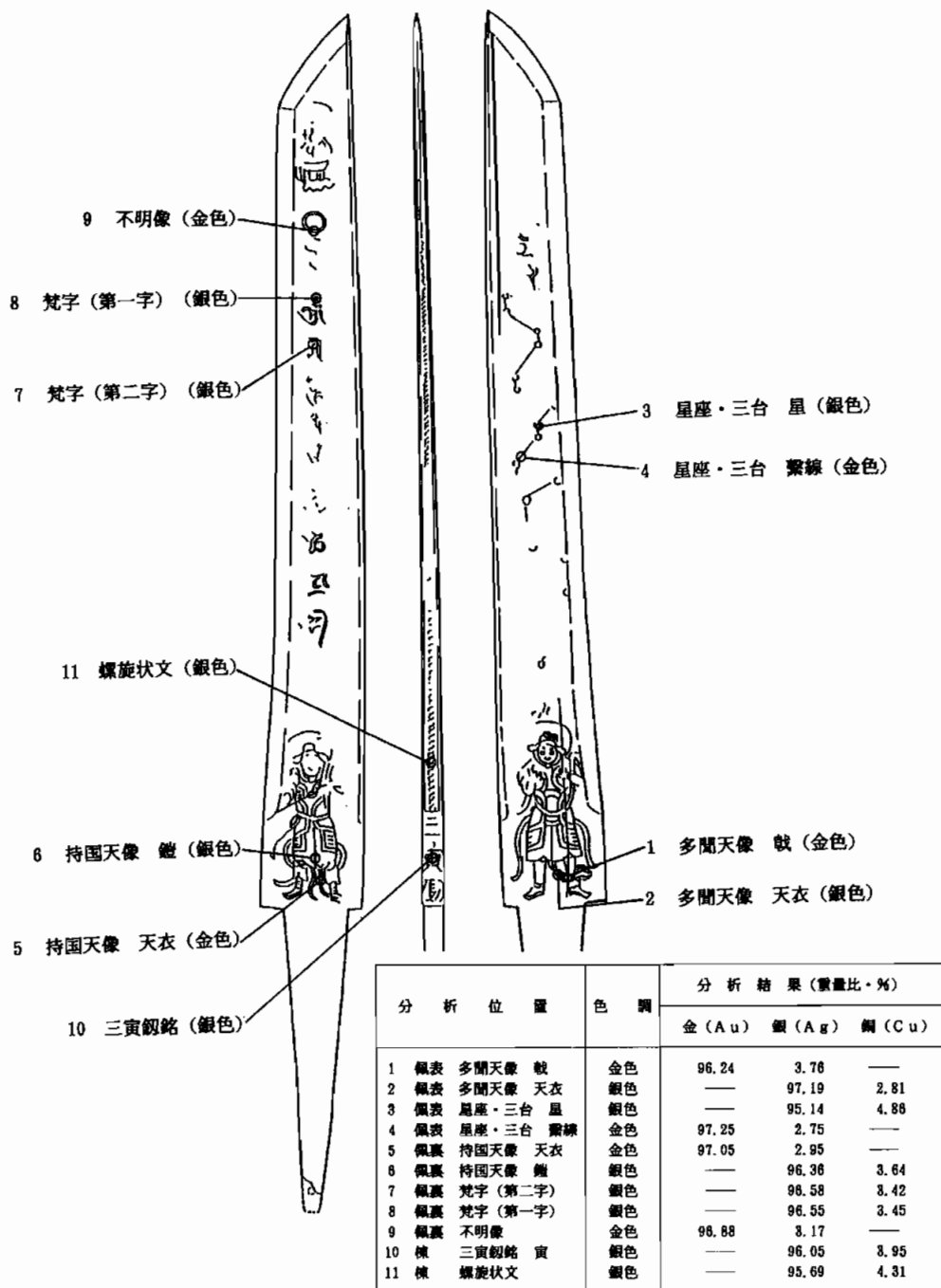
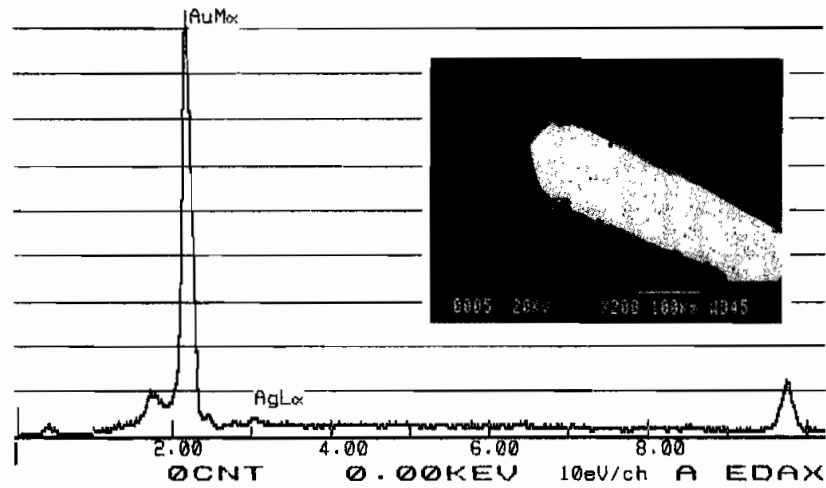
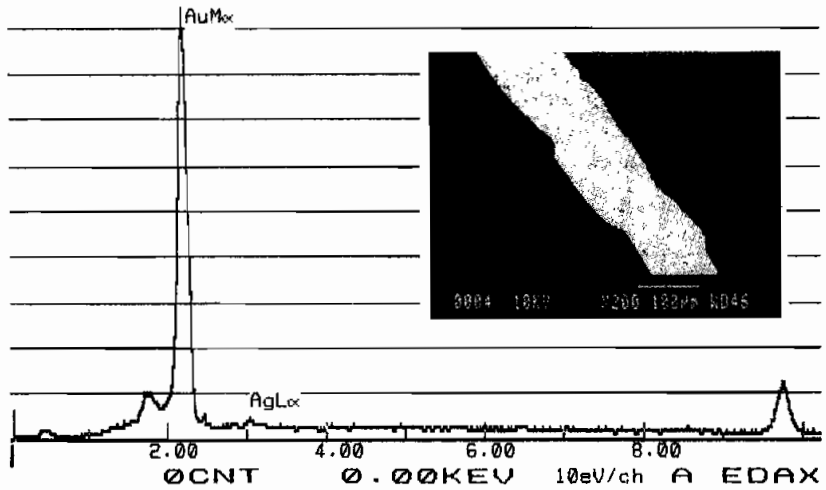
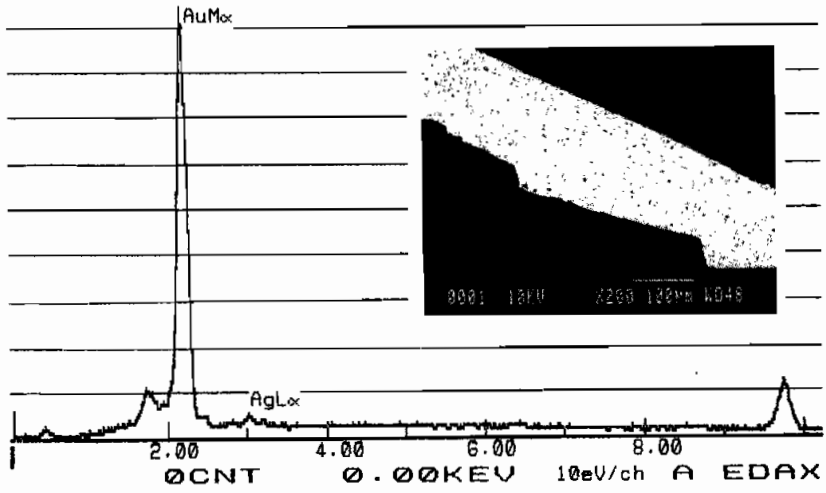
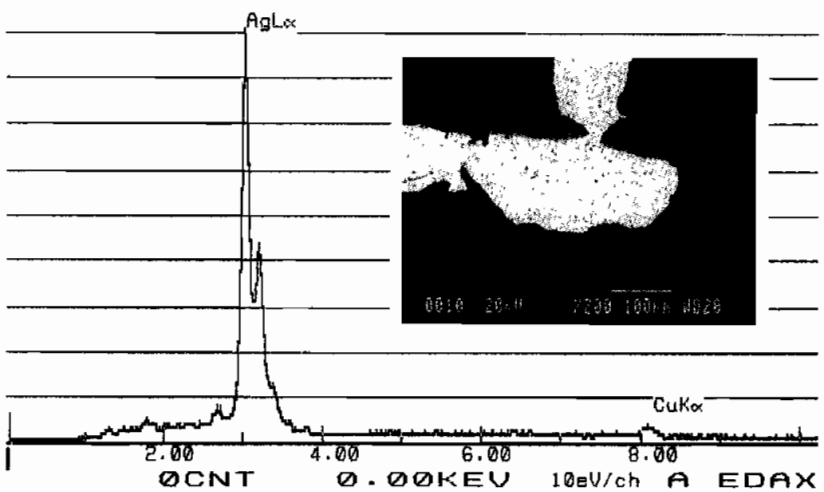
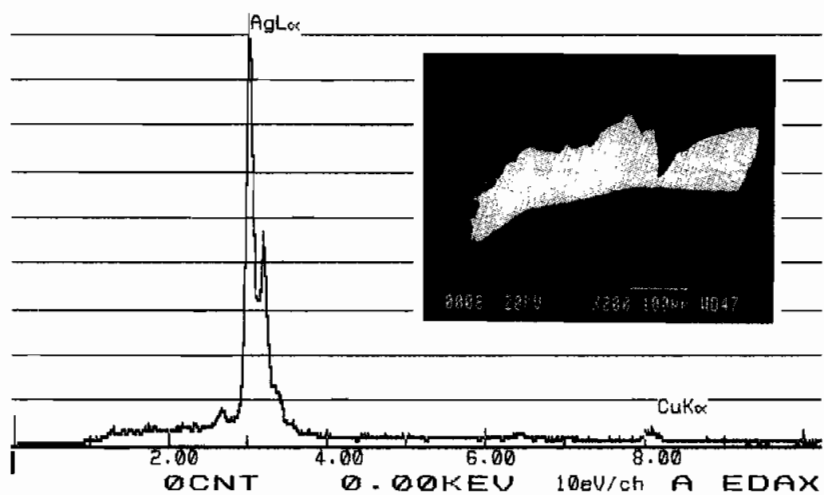
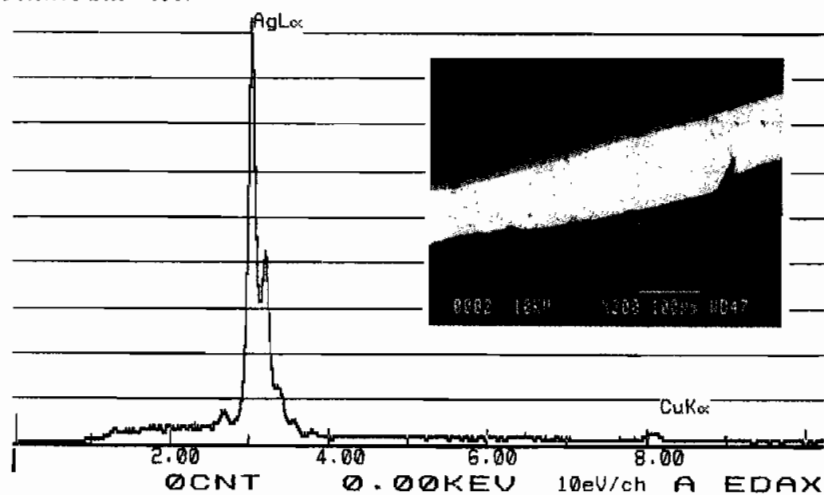


図17 三寅銅金象嵌線の分析



- 上・佩表 多間天像戟 (分析位置1)
- 中・佩表 三台繫線 (分析位置4)
- 下・佩裏 持国天像天衣 (分析位置5)

図18 三寅鈕銀象嵌線の分析



- 上・佩表 多聞天像天衣 (分析位置 2)
- 中・佩裏 梵字 (分析位置 8)
- 下・棟 「寅」字 (分析位置 10)

(3) 韓国の三寅劔・四寅劔

韓国の高麗大学に三寅劔のあることは、1987年に宇田川武久氏の「李朝前期の兵器の諸相と「兵器図説」」に、また、1991年には小笠原信夫氏の「ある七星劔について—付・猪槍のこと」⁽⁵³⁾に紹介されている。しかし、この二書には小海町の三寅劔との関連は語られていず、⁽⁵⁴⁾また、1994年2月の小海町と三寅劔調査検討委員会による三寅劔の調査結果報道があっても両氏からの論評は発表されていない。

著者は、1994年3月に宇田川氏と小笠原氏の二書を見だし、4月に早速に、韓国・湖巖美術館の李午憲氏の紹介を得て高麗大学の三寅劔2点と四寅劔1点を調査し、続いて、朝鮮王朝美術館、韓国陸軍博物館、釜山市立博物館を訪ねて、あわせて15点の三寅劔・四寅劔の調査を行った。

韓国の三寅劔・四寅劔は3つのタイプに分類することができる(図19)。

1は高麗大学所蔵の栗谷(李珥)所有の三寅劔と伝えるもののタイプである。全長59センチメートル、三葉環柄頭に木製の柄、蓮華型鐔をもち、劔身の表、関近くには布目の銀象嵌文様があり、続いて「参寅劔 乾降精神援靈日月象山擅形爲雷電運玄坐推凶惡玄斬貞」の銘文、劔裏関近くの布目の銀象嵌文様につづいて「北斗七星・角・亢・氏・房・心・尾・箕・斗・牛・女・虚・危・室・壁・奎・婁・胃・昴・畢・觜・参・井・鬼・柳・星・張・翼・軫」の二十八宿の星座が真鍮象嵌によって描かれている。

また、栗谷三寅劔よりもやや長く、四寅劔銘の大刀もある。高麗大学所蔵の四寅劔で、全長75センチメートル、三葉環柄頭に木製の柄、獅嘴文鐔をもち、劔表に「四寅劔 乾降精神援靈日月象岳擅形爲雷電運玄坐推凶惡玄斬貞」の銘文、劔裏に北斗七星と二十八宿の星座が真鍮象嵌によって描かれている。朝鮮王朝美術館、韓国陸軍博物館、釜山市立博物館にも同じタイプの四寅劔が所蔵されている。

2は韓国陸軍博物館所蔵の四寅劔で、全長100センチメートル、五葉型柄頭・柄・劔身は一体造りで、柄頭両面に二十八の星辰、柄の両面に呪符、側面に梵字真言、鐔には梵字を象嵌している。劔身の表に関より「四寅劔 乾降精神援靈日月象岳擅形爲雷電運玄坐推凶惡玄斬貞」の銘文、そしてこの銘文帯を両側から挟むように切っ先側から梵字の銘文、劔身の裏に北斗七星と二十八宿の星座が真鍮象嵌によって描かれている。国立博物館にも同じタイプの四寅劔が所蔵されている。

3は高麗大学所蔵の三寅劔で、全長136センチメートル、三葉環柄頭、華葉文の彫られた金属の柄には「参寅劔」の銘が象嵌され、蓮華型鐔をもち、劔身の表に「参寅劔」の銘、裏に北斗七星が象嵌されている。同じ形式で、銘が「四寅劔」「四寅斬邪劔」としているものが朝鮮王朝美術館等にある。

劔の形態、銘文の字体、星辰の描写などが3つのタイプで異なり、これが年代差を示すも

のとなると、1→3→2の順序であろうか。

さて、1・2の銘文は、タイプによって多少字形が異なるものの、これとほぼ一致する銘文を記す刀剣を、中国に見いだすことができる。

中国・明の英宗の正統十年（1445）に完成した『正統道藏』に収録されている『上清合劍鑑圖一卷』の景震劍である。景震劍序は、次のように記す。

夫陽之精者著名於景陰之氣者發揮於震故以景震爲名式備精氣之義是知貞質相契氣象通運用之機威靈有應○神代形之義已○於眞○○鬼摧邪之理未聞於奇制此所以劍面合陰陽刻象法天地乾以魁○爲杪坤以雷電爲鋒而天○所加何物不伏雷電所怒何物不摧佩之於身則有内外之衛施之於物則隨人鬼之用

と述べて、景震劍の図には、柄頭、柄、劍身に次の銘文や符が記されている（図19）。

景 乾降精神應靈日月象岳瀆形 （辛酉符）日月○（歳星）春○（熒星）夏○（鎮星）
季○（太白星）秋○○（辰星）冬

震 爲雷電運玄星摧凶惡亨利貞 （庚申符）戊己岱摧衡紅高河華濟恒風雲雷電

景震劍柄の両面の銘文、「乾降精神應靈日月象岳瀆形爲雷電運玄星摧凶惡亨利貞」は、韓国の三寅劍・四寅劍の1・2のタイプの銘文と比較すると、應と援、瀆と擅、利と斬の3字の相違を除くと全くの同文である。

さて、高麗大学所蔵の栗谷（李珥）所有と伝える三寅劍の箱には次のように記した紙片が貼付されている。

栗谷先生明宗朝人距今三百七十年
右三寅劍寅年寅月寅日製作故名之
先生入山修道時常以此護身僻邪鬼

栗谷は李珥（1536－1584）の号である。李珥は1536年江原道江陵に生まれ、13才で進士試験に合格、29才で戸曹佐郎（正六品）、以後、礼曹佐郎、吏曹佐郎、33才で千秋使書状官として中国・明に遣わされ、右副承旨（正三品）、吏曹判書（長官）、時務六條となったが、48才で生涯を閉じた。仏教や儒教を学んで、『聖学輯要』『擊蒙要訣』などを著し、また、『明宗実録』の編纂にも携わった。この時代、王朝内の政争が絶えず、また倭寇の侵攻もあって、朝鮮の社会は大いに衰えたが、李珥は十万兵養説を唱えるなど民生・国力の回復に大きく貢献した文士・儒学者であった。栗谷所有の三寅劍は、寅年、寅月、寅日に製作したが故に三寅劍と呼ばれ、護身・僻邪の劍であったという。

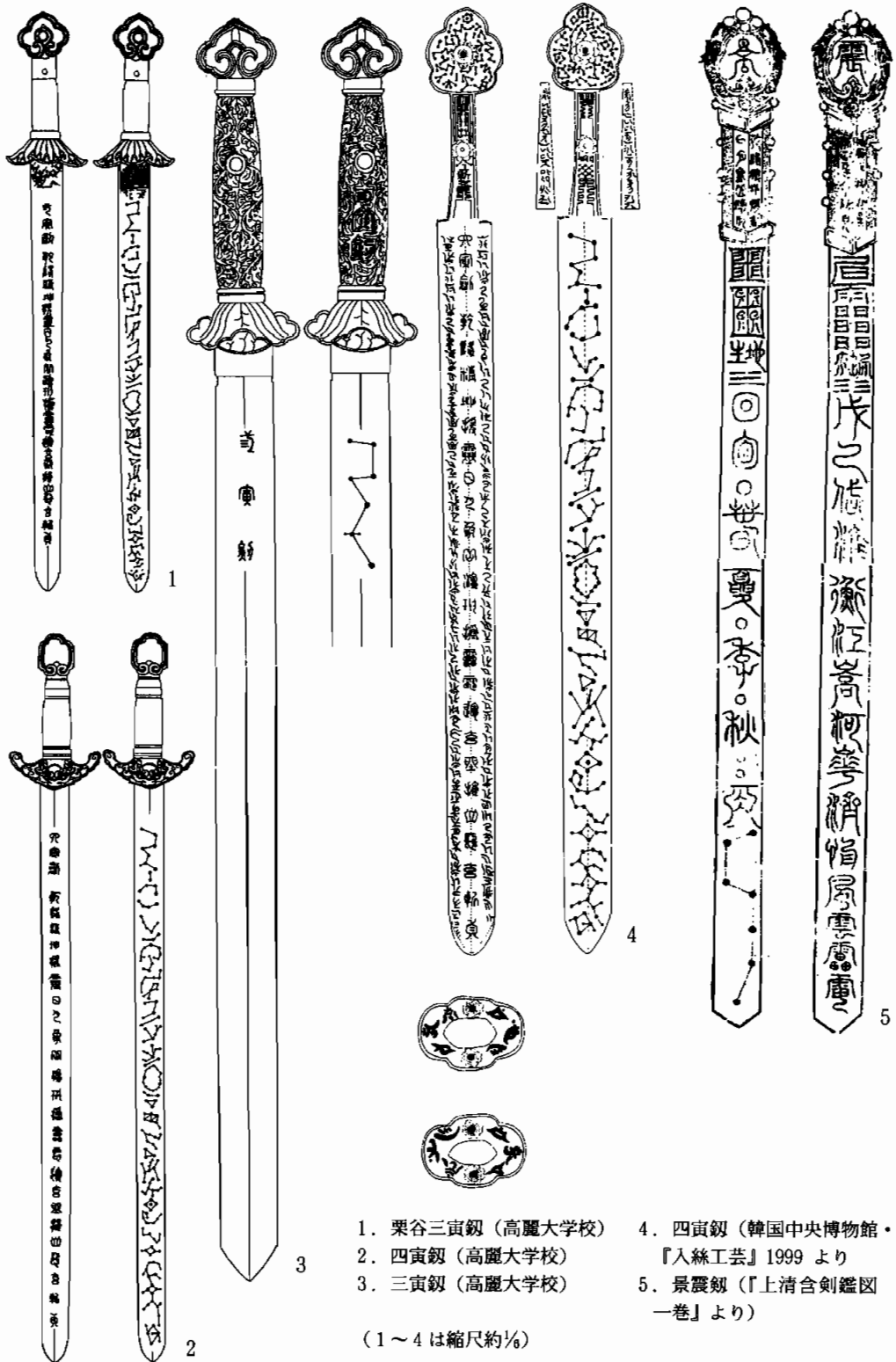
また、『朝鮮王朝實録』にも四寅劍の記述がみられる。

『朝鮮王朝實録』 燕山君十二年丙寅正月（1506）

傳曰. 四寅劍二百造入.

『朝鮮王朝實録』 中宗二四年己丑十二月（1529）

図19 韓国の三寅劔・四寅劔と中国の景震劔



- 1. 栗谷三寅劔 (高麗大学校)
- 2. 四寅劔 (高麗大学校)
- 3. 三寅劔 (高麗大学校)
- 4. 四寅劔 (韓国中央博物館・『入絲工芸』1999 年より)
- 5. 景震劔 (『上清含劔鑑図一卷』より)

(1~4は縮尺約 $\frac{1}{6}$)

憲府啓前壹官事。且四寅劔造作時。必預為山役聚利匠而後。乃可為也。一朔山民弊不貨。私匠一人一日之役。雖不甚害。搜括之弊。亦豈少哉。如此凶歲。雖汲汲之事。尚可停罷。而以不急之事。至於如此。請停其役。命停四寅劔事。餘不无。

『朝鮮王朝實錄』 中宗三十七年壬寅四月 (1542)

・・・凡視等事。勿命停之。習陣之日。十六日命停經筵者。以有故不能親臨。而猶為視事。事體以異故也。在下之人。未知此意。以予為視事寢不如初。其言當矣。工匠則別無他役。只於別造弓四寅劔造成之事。匠人数多矣。如此凶年。命停不難。而別造弓則常時賞賜戍邊將士及守令。故軍務之事。不得已為之。四寅劔寅年寅月寅日寅時所造則非年年所鑄。必於寅年之。此 祖宗朝故事也。今年適寅年。故命鑄之。今則工役垂畢。來月間當告訖云。今若命停。則後日更為之時。其弊尤甚。故不為停役也。此意政院知之。

『朝鮮王朝實錄』 中宗三十七年壬寅四月 (1542)

・・・・・・四寅劔。雖循例造作。只為禳災。涉於左道。實是無用之物也。當此飢歲。多聚公私匠人。累朔攻造。糜費實多。甚非不作無益有害有益之義。請亟命停役。且其監造內官司鑰等。其營私作弊狀。已皆顯發。飾辭不服。所當窮詰。況事係贓罪。未及取服。徑其律。必有後弊。請加訊鞠。取服後定罪。荅曰。日本國王書契。上來後。朝廷可以議處也。四寅劔事。自祖宗朝寅年打造。舊例故。厥初為之。如此險年。聚工造作。非汲事。停之以當。內官司鑰等公事。取服然後定罪可也。

四寅劔は寅年の寅月、寅日、寅時に造る禳災の劔である。朝鮮王朝樹立以来の習わしであり、燕山君12年(丙寅・1506)には、200振りもの四寅劔が造納されている。しかし、四寅劔の造作には多くの山民・匠の労役を必要とし、飢饉の歳にこれを行うとさらに弊害をもたらすとして、中宗25年(1530)には製造を中止、さらに中宗37年(1542)には、飢饉に加えて、左道に使われる無用の物であるとして製造を中止している。このように韓国の三寅劔・四寅劔は朝鮮王朝によって寅年ごとに製造され、その思想的背景は、中国の景震劔との関連から、道教の「佩之於身則有内外之衛施之於物則随人鬼之用」すなわち護身・辟邪の思想に根ざしているのである。

(4) 東アジアにおける三寅劔

寅年・寅月・寅日に造った劔の威をかりて護身・辟邪を願うことは、古くは8世紀の日本に新しくは16~18世紀の韓国に存在することが判明し、また、韓国の三寅劔銘とはほぼ一致する銘をもつ中国の景震劔があり、15世紀の中国にも三寅劔と共通する護身・辟邪の劔の存在したことが判った。そして、その信仰には道教と仏教・儒教が習合していることも三寅劔・四寅劔の漢字銘文や星座・符とともに天部像・梵字銘文が描かれているのを見ると明らかで

ある。

7・8世紀の象嵌銘文大刀象嵌線の組成分析データを持ち合わせていず、いささか飛躍した推測にはなるが、畠山家伝来の三寅劍の金象嵌線の高い純度（96～97%）と銀象嵌線の銀95～98%と銅5～3%の合金比率の特徴は、他の象嵌銘文大刀・象嵌文様大刀のデータと比較すると、日本のデータより中国のデータに近くなり、畠山家伝来の三寅劍は中国で造られた可能性が高くなる。

中国後漢の建初二年五十凍鋼劍や中平紀年大刀にみる護身・辟邪の刀劍は、様々に形を変えながら韓国・日本に広がり連綿と続いている。

6 おわりに

護身・辟災・招福を願う象嵌銘文大刀の銘文の原初的かつ基本的な形は中国・後漢（東漢）に製作された東漢建初二年五十凍鋼劍（77年）や東漢永初紀年鉄刀（112年）、漢中平紀年大刀（184～189年）に見ることができる。現在のところ、この種大刀では東アジアで最も古いこれらの大刀は紀年と鍛練句とでも言うべき五十凍・卅凍・百練などの十分に鍛え造った素晴らしい大刀であることを表す句、辟災、招福の句を極めて簡素に記している。東漢永初紀年鉄刀や漢中平紀年大刀のような刀背に銘のある儀仗用の長刀・長劍に限らず、天廻山3号崖墓金錯書刀（184年）や『貞松堂吉金図』巻下の東漢永元十六年書刀（104年）などの木簡を削り紙を切る文具用の書刀にも同様の銘文が記され、刀劍に辟災・招福の銘を記してその願いを実現しようとするのは、漢代にすでに広く行われていたことを窺わせる。

朝鮮半島三国時代の百済で造られた『塵袋』護身劍は紀年、鍛練句と護身・辟災・招福の銘文を記し、三公戦鬪劍（將軍劍・破敵劍）と一対をなしてその役割を期待されており、七支刀は紀年（372年）、鍛練句と護身・辟災の意味を含む破敵の句が劍表に、百済王の世子が倭王の為に造ったとの造劍の由来が劍裏に記されている。『塵袋』護身劍・三公戦鬪劍は符や銘文の表現・内容が豊富になってはいるものの、その意図するところは、東漢永初紀年鉄刀や漢中平紀年大刀の銘に近く、具体的に象嵌大刀の贈受の銘を付加する七支刀よりやや先行するものと思われるが、両劍が日本にもたらされてからの役割は、これらを保有することによって、護身・辟災・招福を成就し、敵を撃破して権力を獲得し、その権力を保持する王権の証としての銘文大刀であり、この二つの銘文大刀は朝廷と石上神社に代々伝授されてきた。前述の中国・後漢（東漢）の銘文大刀が護身・辟災・招福を抽象的な心の願いとして記すのとは大いに違い、現世の政治権力の保持と継承に使われている。銘文大刀の時代的・地域的な変化・変遷をここに見ることができる。

このような銘文大刀の銘文表現や性格の変化は日本で作刀される大刀も軌を一にする。

銀象嵌大刀は紀年（獲加多支鹵大王の治世年）、鍛練句、吉祥句のほか大刀の保有者（典曹人・无利互）・作者者（伊太加）・銘文の書者（張安）と権力の永続性を記している。また、辛亥銘鉄剣は紀年、鍛練句に加えて、鉄剣の保有者（杖刀人首・乎獲居臣）の八代の家系と獲加多支鹵大王の治世を補佐した履歴を記して権力の正当性と永続性を述べて、吉祥句さえも記していない。額田部臣銘大刀は今失ってしまった上半部に紀年、鍛練句が記されていたと思われ、加えて大刀の保有者（額田部臣銘）・作者者？（阿□素）が記され、辛亥銘鉄剣、銀象嵌大刀と同様の権力の保持の正当性を述べたものと思われる。そして、この三つの銘文大刀が発見された江田船山古墳・埼玉稲荷山古墳・出雲岡田山古墳は、5世紀後半から6世紀初めの地域の首長を埋葬したとされる堂々たる規模の前方後円墳・前方後方墳で、銘文中の権力の正当性・永続性とは、それぞれの地域を支配する地域首長としての権力に他ならない。護身剣・三公戦闘剣が王権の証として鎌倉時代まで朝廷に伝世し、また、七支刀が王権の軍事を司った物部氏の氏神である石上神社に現在まで伝世しているのとは異なり、銀象嵌大刀・辛亥銘鉄剣・額田部臣銘大刀は地域首長としての支配権を認められるとともに、王権の治世を助け支えた功績を讃え記念する品として王権より贈与され、保有者の死とともに古墳に副葬された一代限りの銘文大刀である。

韓国三国時代の伽耶で発見された有銘環頭大刀には、いまは失われた上半部に年紀・鍛練句などがあったものと推測され、残存部分には保有者の辟災と吉祥の願いが記されている。また、有銘円頭大刀には吉祥句とおぼしき字句が記されている。出土遺跡は詳らかではないが、ともに昌寧伽耶の首長墓からの出土と考えるのが妥当で、辟災・招福の願いと地域支配権の証としての象嵌大刀と思われ、保有者の死とともに古墳に副葬されたのであろう。しかし、『塵袋』護身剣や七支刀が日本の王権に代々伝世し、かつ一方で銀象嵌大刀や辛亥銘鉄剣が王権より地域首長に与えられた大刀であるように、伽耶の象嵌銘文大刀が伽耶と百済との関係を表すものとしていいのかはまだ判らない。

王賜銘鉄剣は、王（大王）が与えた剣であることと吉祥句か由来を短く記している。辛亥銘鉄剣に先行する5世紀中頃の銘文大刀で、前述の3銘文大刀と同様に権力の正当性を主張する刀であるが、稲荷台1号墳の位置や小規模な円墳であることから、鉄剣の保有者は地域支配の首長ではなく、畿内と上総を結ぶ要衝の管理にあたる人物であったと考えられよう。

このような銘文大刀の性格は、戊辰銘大刀・金錯銘直刀にも共通する。戊辰銘大刀は7世紀初頭の年紀のみが記され、これを出土した箕谷2号墳も小規模な円墳であり、大刀の保有者は畿内と伯耆・出雲を結ぶ要衝の管理にあたる人物であったと思われる。金錯銘直刀の銘文及び出土遺跡は詳らかではないが、戊辰銘大刀のように年紀のみまたは丙子椒林剣のように人名のみが記されていた可能性がある。いずれもが、その地位と職掌の証として王権より授かり、保有者の死とともに古墳に副葬された、一代限りの銘文大刀である。

飛鳥・奈良時代になって、中国から新たにもたらされたものと思われる三寅劔は文字と星宿・天部の図像により護身・辟災を願い、正倉院呉竹鞘杖刀（七星劔）と聖徳太子佩用と伝える四天王寺七星劔は星宿と瑞雲の図像により護身・辟災・招福を願い、また、線刻ではあるが法隆寺多聞天持物の七星劔も星宿と瑞雲の図像により護身・辟災・招福を神仏に願っている。これらの銘文大刀・七星劔は、東漢永初紀年鉄刀や漢中平紀年大刀がそうであったように、心身の安寧と辟災・招福を願う大刀であった。さらに、平安時代の不動明王慈護明を象嵌する相應和尚劔や表に「貞觀九年歲次丁亥十月五日始」の銘と星辰、裏に瑞雲と火焰を表わす東寺不動尊九徹劔、室町時代の不動明王真言と北斗七星を象嵌する禰祭劔は、不動明王に辟災や病気の平癒を願う加持祈祷に使われていたことが文献に見え、奈良時代の銘文大刀とは質を異にしている。ただ、朝廷には飛鳥・奈良時代から中世を通して、王権の象徴としての象嵌銘文大刀である『塵袋』護身劔・破敵劔が伝えられているのは前述のとおりである。

韓国の栗谷三寅劔は入山修行の際に護身・辟邪の劔として所持され、寅年・寅月・寅日に一度に200振りも造作されたという三寅劔・四寅劔は朝鮮王朝国王から臣下に贈与される王賜の劔・禳災の象嵌銘文大刀であった。

中国・後漢の象嵌銘文大刀は道教思想に基づく辟災・招福の大刀として造られ、東アジアの銘文大刀に共通した性格として受け継がれる一方で、朝鮮・百済と日本・古墳時代では辟災・招福に王権や地域支配権の政治的要素が付加された。しかし、飛鳥・奈良時代以降にも日本には道教と仏教が習合した形での辟災・招福の象嵌大刀としてもたらされた。その願いとかたちは、今も日本・韓国・中国の社寺や民間信仰の中に息づいている。

謝辞 本調査・研究にあたってお世話になりました方々・機関のお名前を記し感謝申し上げます（敬称略）。

高山理介（三寅劔所蔵者）・島田恵子（小海町文化財調査員）・李午憲（湖巖美術館）・李命憲（朝鮮王朝宮中遺物展示館）・朴龍雲（高麗大学）・金右臨（高麗大学）・斉藤努（国立歴史民俗博物館）・（株）堀場製作所・日製産業（株）・三ツツ理化学工業（株）

付記 本稿は「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究－日韓文化交流の原点をさぐる－」（李午憲・山口誠治との共同研究、財団法人韓国文化研究振興財団助成・1994年度）、「日本象嵌技法の系譜－材質・技法の科学的分析からの研究」（文部省科学研究費助成・1994～95年度）、「古代象嵌銘文大刀の始原に関する総合的研究」（文部省科学研究費助成・1997～98年度）の成果を含みます。助成下さいました機関に対し感謝申し上げます。

註

- 1 宮崎市定『謎の七支刀』1983年
- 2 若林勝邦「銀象嵌を施せる鉄刀及び鏢について」『考古学会雑誌』3-1 1899年
- 3 古谷 清「江田の古墳と女王卑彌呼」『東洋時報』147 1911年
- 4 埼玉県教育委員会編『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』1982年
- 5 島根県教育委員会編『出雲岡田山古墳』1987年
- 6 八鹿町教育委員会編『箕谷古墳群』1987年
- 7 市原市教育委員会『王賜銘鉄剣概報』1988年
- 8 神林淳雄「鉄製大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』30-3 1940年
- 9 橋本博文「亀甲繫鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会 1981年
- 10 橋本博文「金銀象嵌裝飾円頭大刀の編年」『月刊考古学ジャーナル』266 1986年
- 11 橋本博文「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993年
- 12 町田 章「鉄に象嵌」『鉄の話題』46 1984年
- 13 西山要一「大和と象嵌大刀」『大和の自然と文化』（奈良大学文化講演会講演資料）1985年
- 14 西山要一「古墳時代の象嵌—刀装具について—」『考古学雑誌』72-1 1986年
- 15 横田義章「古墳時代の象嵌文様—九州の諸例紹介を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』10 1985年
- 16 瀧瀬芳之・野中 仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀」『研究紀要』12 1996年
- 17 鈴木敏則「静岡県内の象嵌文」『四ッ池古墳群』浜松市文化協会 1986年
- 18 松田隆嗣・今津節生『出土鉄製品の構造技法調査』1992年
- 19 樋口清治・青木繁「金属製品のクリーニングにおけるエアブラッシュの応用—鉄錆で隠された銀象嵌の露出処理」『保存科学』13 1974年
- 20 西山要一 註4 および『象嵌銘文の表出法と保存』（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター特別研修資料）1985年
- 21 秋山隆保「戌辰銘鉄刀の保存科学的研究」『但馬・箕谷2号墳出土戌辰銘鉄刀』1985年
- 22 西山要一「文字の書かれた大刀—象嵌銘文大刀」『考古学と自然科学』31・32合併号 1995年
- 23 西山要一「日本古墳時代の象嵌大刀」『日韓古代象嵌遺物の基礎的研究』1996年
- 24 李 午憲「古墳出土鉄製遺物の象嵌表出方法と保存処理」『保存科学研究』第9輯 1988年
- 25 李 午憲・金 邱軍『三国時代の鉄製象嵌技法とその科学的研究』1992年
- 26 李 午憲「古代鉄製品象嵌技法および材質についての科学的研究」『湖巖美術館研究論文集』1号 1996年
- 27 史 樹青「我国古代的金錯工藝」『文物』1973年第6期 1973年

- 28 王 愷「徐州発現的東漢建初二年五十涑鋼劍」『文物』1979年第7期 1979年
- 29 劉 心健・陳 自経「山東蒼山発現東漢永初紀年鉄劍」『文物』1974年第12期 1974年
- 30 劉 志遠「西都天廻山崖墓清理記」『考古学報』1958年第1期 1958年
- 31 潮見 浩「天廻山3号崖墓出土金錯書刀をめぐって」『日本民族・文化の生成1』1988年 本文中
に掲載の銘文は潮見浩氏の説による。
- 32 梅原末治「日本出土の漢中平紀年大刀—大和榛本東大寺山古墳出土品」『大和文化研究』7-11
1961年 ほか
- 33 福山敏男「石上神宮の七支刀」『日本文化の起源』2 1971年 ほか。
- 34 「塵袋」日本古典全集
- 35 東野治之「護身劍銘文考」『文学』48-3 1980年
- 36 梅原末治『玉名郡江田村船山古墳調査報告(上・下)』1921年、東京国立博物館編『江田船山古墳
出土国宝銀象嵌大刀』1993年 ほか
- 37 末永雅雄「金錯銘直刀身」『考古学雑誌』56-1 1970年
- 38 末永雅雄『日本上代の武器』1941年
- 39 小海町教育委員会『三寅劍』1994年
- 40 西山要一「三寅劍の象嵌技法とX線透過写真・エミシオグラフィーによる研究」『文化財学報』13
1995年
- 41 『公衛公記 昭君門院御産愚記』史料纂集1974年、水野正好「古代まじなひ世界—攘災・招福・呪
詛」『神と人 古代信仰の源流』1986年
- 42 『明匠畧傳』群書類従・第五輯1960年、水野正好「古代まじなひ世界—攘災・招福・呪詛」『神と
人 古代信仰の源流』1986年
- 43 福島県教育委員会・棚倉町教育委員会・福島県立博物館の1994年12月6日の記者発表資料、福島県
教育委員会文化課(荒木隆)『流麁寺跡第2次調査の概要』1996年3月(第38回福島県考古学会大
会発表要旨)
- 44 西山要一「中世の銘文大刀—山形県上杉神社伝世瑪祭劍にみる銘文大刀の系譜」『求真能道』1987
年
- 45 東京国立博物館『有銘環頭大刀』1992年 ほか
- 46 韓永熙・李相洙「昌寧校洞11号墳出土有銘円頭大刀」『考古学誌』2 1990年
- 47 西山要一「柳谷古墳出土銀象嵌柄頭の保存処理と材質分析」『柳谷古墳』1988年
- 48 西山要一「垣内田3号墳出土の象嵌円頭柄頭・鞘尻金具の元素分析と保存処理」『近畿自動車道
(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊2』1990年
- 49 西山要一「金属製品の分析調査」『本郷大塚古墳』1992年
- 50 斉藤努・田口勇・西山要一「X線CTなどを用いた象嵌資料の非破壊分析」『国立歴史民俗博物館

研究報告』26 1990年

- 51 渡辺智恵美「電子顕微鏡による古墳時代の象嵌の観察」『元興寺文化財研究』27 1987年
- 52 加古千恵子「庄境1号墳出土遺物の保存処理と化学分析」『庄境1号墳』1987年
- 53 宇田川武久「李朝前期の兵器の諸相と「兵器図説」」『国立歴史民俗博物館研究報告』第十二集
1987年
- 54 小笠原信夫「ある七星剣について－付・猪槍のこと」『刀剣美術』416 1991年